小学校低学年の部

最優秀賞

ぼくが見つけた思いやり

北園小学校　三年　石倉（いしくら）　蓮（れん）

ぼくは、お母さんと妹といっしょに、初めて駅に行きました。きっぷ売り場へ行くとちゅうに、妹がゆかに点字ブロックがあることに気づきました。そしてお母さんが、

「目が不自由な人が分かりやすく歩くためにあるんだよ。」

と、教えてくれました。ほかにも、まだあるかなと思って歩いていると、エレベーターのボタンにも、丸い点がありました。そしたらお母さんが、

「それは、点字だよ。これも目が不自由な人に分かりやすく教えているものだよ。」

と、教えてくれました。

きっぷを買っている時に、新かん線のアナウンスが、入って来ました。ぼくは、それを、

「目が見えない人のためにあるの。」

と、お母さんに聞きましたが、お母さんは、

「目が見えない人だけじゃなく、みんなに分かるように、アナウンスが入るんだよ。」

と教えてくれたので、理由が分かりました。他にもまわりに思いやりがあるのかな、と気をつけて見てみることにしました。

図書館にも点字ブロックがありました。デパートのエレベーターにも点字がついていることに気がつきました。今まで気がつかなかったけど、いつも行っているところにたくさんの思いやりがあるんだなと思いました。他にも思いやりがあるかな、と思ってお母さんに聞いてみると、

「音が鳴るしんごうきもあるよ。」

と教えてくれました。まわりにはたくさん思いやりがあるなと思いました。まわりにたくさん思いやりがあるので、ぼくにもできる思いやりがないか、考えました。

この前、おばあちゃんが、にもつをもってて、かいだんを上っていたので、ぼくもにもつをもっていましたが、

「もってあげる。」

と、言いました。おばあちゃんは、

「だいじょうぶだよ。」

と、ことわりました。お母さんは、

「おばあちゃんを思いやった良い言葉をかけてあげたね。」

と、ほめてくれました。これからも、自分のできる思いやりを考えながら、やっていきたいと思います。

講評

訪れた駅で、どうして点字ブロックがあるのか、どうしてアナウンスが流れるのかと疑問をもち、解決を図りながら「思いやり」の大切さに気づく様子がくわしく書かれています。そして、この気づいた「思いやり」をさらに身の周りへと向けて考え、一層大切にしていこうとする気持ちもしっかり述べられています。

優秀賞

おじいちゃんだいすき

南小学校　一年　髙村夏羽

わたしのおじいちゃんは、つえがないとあるくのがたいへんそうです。ひざやこしがいたくて、とうとうしゅじゅつをしました。ずっとにゅういんをしていて、あえなくて、さみしかったです。

おじいちゃんは、いつもいっしょにあそんでくれます。トランプで七ならべや、しんけいすいじゃくをするといつも、おじいちゃんはまけます。

「なつはは、つよいなー。」

「かてないなー。」

といって、やさしいかおでわらいます。おじいちゃんのわらったかおがだいすきです。

スーパーにおかいものにいったとき、かいだんがあったから、うしろからおじいちゃんのこしをおしてあげました。らくになるようにしたけど、おじいちゃんは、まえにてをついてころんでしまいました。おかあさんがたすけてくれました。

「だいじょうぶだよ。」

とわらっていたけど、わたしは、なみだがでそうになりました。いいことをしたのに、もうすこしでけがをしそうになったからです。

てつだいたいし、よろこんでほしいです。どうしたらたすけてあげれるのか、わかりません。でも、わたしはこれからもずっとおてつだいをしたいです。おじいちゃんのわらったかおがみたいからです。ずっとずっといっしょにあそぼうね。

講評

つえがないと歩くのが大変なおじいちゃんとの心温まるふれあいが、紹介されています。トランプをしてわらっている時のおじいちゃん、スーパーで転んでも「だいじょうぶだよ。」と言った時のおじいちゃんなど、大好きなおじいちゃんへの「思いやり」があふれています。

優秀賞

だいじょうぶだよ。

三本木小学校　一年　漆戸翔梨

おばあちゃんと、さんぽにいくのが、すきでした。

てをつないで、かいものにいくのが、たのしかったです。

三ねんまえに、びょうきで、からだが、うごかなくなりました。たいいんしてきた、おばあちゃんは、やせていて、わらわなくなっていて、ベッドにねたきりになりました。

「かいりちゃん。」

とよばれても、なにをはなしたらいいのか、わからず、おかあさんのうしろに、かくれてしまいました。おばあちゃんのかなしそうなかおをみたら、ちかくにいるのが、いやでした。

そのひから、おばあちゃんのいえにいっても、となりのへやから、おばあちゃんをみているだけでした。なれない、ひだりてで、ごはんをたべたり、たいへんそうで、かわいそうに、おもいました。

「かいりちゃん、ごめんね。」

あるひ、おばあちゃんがいいました。

うごけなくて、どこにも、いけなくなってわるいなぁ、とおもったそうです。

わたしは、そんなことはないと、おもってたいいんしてから、はじめて、わたしから、はなしをしました。おばあちゃんは、わたしのはなしをうん、うん、とわらいながらきいてくれました。

たいいんしてからはじめて、えがおがみれて、うれしかったです。

それからは、しりとり、えほんをよんだりおばあちゃんが、うごかなくても、えがおになれるように、はなしかけました。

おばあちゃん、うごけなくてもだいじょうぶだよ。

たくさんはなしをして、ほんをよんだり、たくさんわらって、ながいきしてね。

講評

大好きなおばあちゃんが病気で体が動かなくなった時、心配なのにどうしたらよいのかわからない複雑な気持ちがくわしく書かれています。それでも、おばあちゃんに元気になってほしいと本を読んであげたり、話しかけてあげたりする「ふれあい」の中に、優しさがいっぱいつまっている作品です。

優良賞

おもいやり

南小学校　一年　畑山　楓卯花

わたしは、ほいくえんのねんちゅうぐみのころからおもいやりについてかんがえるようになりました。

たとえば、あたらしくきたおともだちがいるときはままごとをしていっしょにあそびました。はやくほいくえんになれてほしいし、ひとりでふあんだとおもったからです。あたらしくおともだちがきたときにはいっしょにあそんでなかよくなりました。

せんせいのおてつだいもたくさんしました。テーブルをふいているときにこえをかけてふきました。よごれていたテーブルがきれいになってくるとたのしいし、みんなにきれいなテーブルをつかってもらいたいとおもったからです。

しょうがっこうでは、ゆかやこくばんのそうじをがんばっています。みんながきもちよくべんきょうできたらいいなぁとおもったからです。そのほかにもゆかがぬれていたらふいています。おともだちがころんでけがをしないようにするためです。ごみがおちていたらひろうようにもしています。

きゅうしょくのはいぜんでおおくもりつけしてというおともだちがいるときは、たりなくなってしまうとたべれなくなってしまうおともだちもいるので、そのときはみんなおなじだよとはなしています。わたしは、きゅうしょくがだいすきでのこしたことがありません。つくってくれたひとたちにありがとうというきもちがあるから

です。
しょうがっこうのべんきょうではどうとくがすきです。こころのべんきょうができるからです。これからもみんながきもちよくすごせるようにかんがえていきたいとおもっています。

佳作

ぼくとおばあちゃん

ちとせ小学校　三年　上明戸（かみあきと）　遥（はる）　琥（く）

ぼくは、学校がおわると、毎日バスで帰ります。家に帰っても、「お母さんたちは仕事だから、いないんだよな」と思うけど、おばあちゃんがいます。おばあちゃんとは、遊んだりしないけど、「はる、おかえり。」と言ってくれる人がいると、あん心します。

そんなおばあちゃんは、今年になって、こしのほねが三つつぶれてしまい、家の中では、歩行きをつかって、やっと歩いています。重たいものも、持てなくなりました。だから、おばあちゃんがせんたくをする時は、ぼくがせんたく物を運んで、おばあちゃんがせんたくきを回して、おわったら、またぼくがせんたくものを運んで、きょう力しています。

「おかえり。」と、ぼくを待っていてくれるおばあちゃんが、まだまだ元気でいてくれるように、これからも、ぼくのできることをして、たすけあいします。

小学校高学年の部

最優秀賞

〝その先にあるもの〟

北園小学校　六年　福（ふく）島（しま）　丈太郎（じょうたろう）

〝その先にあるもの〟これは、僕が小学校最後となるほんわかハート展の作文に選んだテーマだ。最後まで読んでもらえると、何を伝えたいか分かってもらえると思う。このほんわかハート展のおかげで、僕は今までさまざまなことを考える機会を与えてもらった。普通の毎日を送っているだけでは、「改めて考える」ということはまずなかったと思う。今回はいろいろ悩んだ結果、今年六月に行われた運動会のことを作文にして伝えたいと思う。

今年の運動会はコロナによる制限がなく、去年とは違って、大きな声でエールを送ったり、仲間を笑顔で出むかえることができたり、明らかに去年と違って活気にあふれたにぎやかな運動会だった。その運動会の一番最後に僕達六年生が全員で行う〝表現〟という種目があった。それは組体操とダンス。八十名全員でひろうするというものだ。結果からいうと大成功。

でも、その大成功への道のりは簡単なものではなかった。正直つらかった。組体操に関しては、僕は体が大きいので、基本的には土台で、友達を支える役割。グラウンドに手をつきひざまづく。自分と友達の体重が僕の手やひざや足に重くのしかかり痛みに耐えなけ

ればならない。手足は汚れ、顔も頭も何もかもほこりまみれ。でも、練習終わりにみんなで汚れた顔を見合って笑いあうのは楽しかった。

ダンスは組体操以上に大変だった。僕はダンスは得意ではない。はっきり言って苦手だ。ダンスの映像を見た時はがく然とした。こんなの無理にきまっている。できっこない。そう思ったのは僕だけではなく、ほとんどの人がそう感じていたようで、口々にグチをこぼしていた。苦手な僕ならまだしも、できそうな友達ですら、無理だよと言っていた。それを聞いてなおさら、僕になんかできる訳がないという気持ちになった。そんな気持ちで日々練習しても上達する訳もない。何のためにこんなに頑張らなきゃいけないんだろうと思いながら練習をした。その後もグチは減ることはなく、逆に増える一方。毎日毎日、昼休みを潰しての練習。いつもなら、友達とサッカーをしたり楽しく過ごせる昼休みのはずなのに。苦手なダンスのせいか?昼休みが潰れるせいか?僕はだんだんと運動会がおっくうになりはじめていた。

そんなある日、先生が曲のスピードを遅くしようと提案してくれた。その言葉でほんの少しだけ希望を持つことができた。昼休みの練習も日課になり、僕の意識も少しずつではあるが変わりはじめていた。そのころから昼休みのダンスがイヤではなくなっていたことに自分なりに気付いていた。

そして、六月三日。全校生徒誰一人欠けることなく運動会は始まった。それぞれの競技が活気あふれる中で行われ、あっという間に最後の種目。六年生の表現の番がきた。友達を見ると少し緊張しているように見えた。僕も同じだ。各クラス横並びで全員がはだしになり、入場曲に合わせ頭の上で手拍子をする。ウワァー!!と大きな声と共に一斉に走って行く。初めは組体操。必死だった。一生懸命だった。手や足の痛みもあまり感じることなく終わった。そしてダンスの曲が流れそれぞれ移動していく。その時友達と目が合った。友達は笑っていた。それを見て僕も笑った。四分弱のダンスはあっという間に終わった。あんなにイヤだったはずのダンスがとても楽しかった。みんなの顔はすがすがしくほこらし気に見えた。

その時僕達の前から拍手が沸いた。観客席に目をやると、お父さんお母さん達はみんな笑顔で力強い拍手をしてくれていた。中には涙を流している人も見えた。僕はその笑顔と拍手がまるで、ありがとう、ありがとうと何度も何度も言ってくれているように聞こえた。その笑い顔と拍手で僕もまたありがとうという気持ちになった。そのとき僕は気付いた。「この笑顔が見たくて今まで頑張り続けてきたのではないか」と。そして、何かすてきなものをもらったような気持ちになった。この笑顔と拍手は僕一人ではもらえることはできなかった。グチを言いながらも頑張ることができたのは友達がいてくれたからこそだ。

初めはうまくいかな

くてもいい。上手にできなくてもいい。友達や仲間と助けあい、ふれあい、思いやり、あきらめず最後までやりきれば、きっとその先にすてきな何かがあるんだと思う。僕はこれからの人生の中でいろいろなことにチャレンジをし、あきらめず、友達、仲間と助けあい、ふれあい、思いやり、もっともっとこの〝すてきなもの〟を増やし続けていきたいと思う。

講評

この作文を書くことを機会に、毎日の生活を「改めて考える」ことにした作者。そして、最上級生として臨んだ運動会を題材に取り上げ、活動する中で学んだ「たすけあい」「ふれあい」「おもいやり」を今後の生活に生かしたいという願いをこめてまとめています。題名の「その先にあるもの」に、大きな希望も感じることができます。

優秀賞

やさしさあふれる地いきへ

西小学校　五年　佐々木（ささき）　麻央（まお）

わたしは、「たすけあい」について考えた時、学校でふくし体験教室をしたことが、「たすけあい」につながるのではないのかと思いました。車いす体験、視覚しょう害者体験、高れい者体験をしました。車いすの人は、ふつうに歩いたり、動いたりすることよりも大変なことが分かりました。視覚しょう害者体験では、どこに何があるかが分からなくて、不安な気持ちであることがよく分かりました。高れい者体験では、体が重くて、自分の好きなように動けなくて、指先が使いづらいことが分かりました。だから、車いすの人、視覚しょう害者、高れい者などしょう害のある人がこまっていたら、進んでたすけたり、やさしく声をかけたりして、思いやりのある行動をとりたいです。そして、みんながたすけあいのできる地いきになってほしいです。

そして、このときの声のかけ方についても考えました。相手は、たすけてほしいときと、自分でがんばりたいときがあると思います。おどかさないようにやさしく「何か手伝えることはありませんか」と聞くと相手も悲しくなることはないと思います。よく使ってしまう「〇〇してあげる」という言葉は、しょう害をもつ方にとっては少しきつい言葉だと考えました。たとえば、友達には、「〇〇してあげるよ」「〇〇してあげようか」などとふだんふつうに使っていますが、しょう害がある人にとっては、上から目線の言葉に感じたり、いやな気持ちになる人もいると思います。ですから、しょう害をもつ人にとっては、本当にきつくなく、やわらかい言葉なのかを考えてから声をかけていきたいです。

そのためには、目の前にいるしょう害がある人を家族などの大切な人だと思ってたすける気持ちを日ごろから意識して生活していきたいです。

私が体験したしょう害者体験の中でも、一番大変だなと感じたのは、視覚しょう害者体験でした。今、私が住んでいる十和田市には主な大きい道路にしか点字ブロックがありません。すぐに点字ブ

ロックをとりつけることはできないと思います。だからこそ、私たち目の見えている人が近くで助けられるといいと思いました。

そのためには、視覚しょう害のある人たちと目の見える私たちが協力して、どこに点字ブロックをつけるといいかをいっしょに考える機会があればいいと思いました。

例えば、学校にしょう害者を講師としてまねいて話を聞いてみたり、しせつに行って話を聞いてみたりして、どうすると住みやすい地いきになるかを話し合うといいと思いました。また、住宅地にある交差点などや、ふつうの道路にも点字ブロックをつけたり、だん差が多い道路やでこぼこしている道路をバリアフリーに直したりするといいと思いました。

このように、しょう害のある人は日ごろから目が見える人よりも大変な思いをしているからこそ「たすけあい」を大切にしていきたいと思いました。また、バリアフリーがないところやでこぼこして不便な道路は、今すぐに直すことはできないけれど、そこを、「たすけあい」でしょう害のある人をサポートできる地いきになっていけたらいいなと思いました。そして、「たすけあい」のあふれるやさしい、あたたかい地いきになっていってほしいです。

講評

学校で行われた福祉体験教室を通して、障害者の方々への「たすけあい」をその方々の立場になって考え、どのように行動すればよいのかがまとめられています。また、「『たすけあい』のあふれるやさしい、あたたかい地いきになってほしい。」というメッセージもしっかり発信されています。

優秀賞

みんなで助け合い 東日本大震災

西小学校　五年　佐々木（ささき）　利望（りの）

私が産まれる前、二〇一一年三月十一日に起きた「東日本大しん災」。地しんによって引き起こされた巨大津波で大きなひ害が起き、今でもテレビなどでよく見ます。また、他には、福島第一原発のばく発など世界各地にも情報が流れています。日本のひ害を知った世界の国の人は、各国から応えんメッセージ、しえん物資、き付金をとどけたそうです。その他、日本のけいさつや消防、自えいたいなどの協力によりひ災者の方々を助け、勇気づけたそうです。私は、東日本大しん災の様子をテレビで見た時、ぼう然と高台から泣きながら、流されている車や家、木などを見ている人に心がいたみました。いつも当たり前にすごしていた家族などもいっしゅんにしてはなれていくのを想像したくありません。しばらくして、地しんがおさまり津波が落ちつくと、東日本の家や街なみがガラリと変わっていました。しかし、そんな中でも、自えいたいやボランティア、地元の方々が、力を合わせ修復に向けて動いていました。テレビを見て家族や親せき、学校の友達がいなくなるなんて、もし私が一人になったらどうしようと考えると不安になります。

食料やガス、水道、電気がある生活を当たり前に送っていましたが、改めて自分の生活を見直したいと勉強になりました。こまっている人がいたら進んで助けたいと思いました。東日本大しん災は、自然のことなのでこれからもっとくわしく知り、何かあった時には

自分から進んで周りの人達を助け、役に立つ大人になりたいと思います。

講評

二〇一一年三月十一日に起きた「東日本大震災」を取り上げ、「たすけあい」の大切さについて考えています。世界中の人々の「たすけあい」によって、少しずつ立ち直っている人々の思いに寄り添いながら、これからをどのように生きていけばよいのか、自分の考えもしっかり述べられています。

優秀賞

オレンジリング

西小学校　六年　塩沢　翼

ぼくたち西小学校六年生は、今年で三回目となる「認知症サポーター養成講座」を、七月十二日に行いました。

この講座を受ける前の高れい者の印象は、耳が遠くなったり、目が悪くなったり、足こしが弱くなるなど、体の不自由さを感じているはず。つまり、家族の協力が必要な人が多いのではと思っていました。また、人によっては同じことを何度も聞いてきたり、物忘れがあったりなどで、一緒に暮らしている家族の中でも、とっても大変な思いをしている人もいると思います。

まず最初に学んだことは、地域包括支援センターについてです。困っている高れい者や家族を支援するために、地域包括支援センターがあります。ここでは、高れい者の相談窓口として、あらゆる分野の専門家が配置され、生活問題を解決するために支援しています。もし困っている人がいたら、一人でなやまず相談を聞いてくれる人たちがいることを、教えてあげたいです。

次に学んだことは、認知症の人への接し方です。認知症が進むと、それまでできていた日常生活ができなくなったり、記憶力が低下し、ついさっきのことも、忘れてしまったりすることがあります。しかし、それを否定したり、放置したりせずに、安心感を与えられるような接し方として「おどろかせない、急がせない、自尊心をきずつけない」の「三ない」が重要であることも学びました。

ぼくたちは実際に声かけ体験もしました。高れい者を演じるスタッフから、目線の高さを相手に合わせ、質問を一度にたくさんしない、とアドバイスをいただきました。そして講座の最後には、受講の証明となる「オレンジリング」を受け取りました。

今後、高れい者と接するときは、これらのことを活かして、ゆっくりはっきりと優しい言葉で話し、相手の失敗を否定しないで大丈夫だよという気持ちで話を聞いてあげたいです。

最後に、ぼくのお父さんとお母さんも、介護の現場や医りょうの現場を通して高れい者と関わり合っています。ぼくも将来、少子高れい化が進む中で、医りょう関係者の一員として地域社会にこうけんできるよう、目標に向かって日々の勉強をがんばりたいです。

講評

今年で三回目となる「認知症サポーター養成講座」を受講して受け取った「オレンジリング」。そのリングに込められた高齢者の方々と接する時の思いもよくまとめられています。また、自分の将来の目標である「医りょう関係者の一員として地域社会にこうけんする。」に向かう強い意志も伝わってきました。

優良賞

私の大好きな ひいおばあちゃん

北園小学校　四年　田中凜優

私には、大好きなひいおばあちゃんがいます。私のとなりの家に住んでいます。とてもはたらきもので、暑い日でも、外で庭の草取りや、植物の世話をしています。また、冬には、だれよりも早く起きて、雪かきをしてくれています。そして、家族みんなで、協力して、雪かきをします。

そんなひいおばあちゃんには、びっくりすることがあります。一つ目は、友達がたくさんいることです。学校から帰る時、よく家の前で友達とおしゃべりをしています。たくさん友達がいるのが、すごいと思います。二つ目は、としをとっていても、軽トラを運転していることです。でも、としなので事故にあわないか心配です。三つ目は、毎日、黒にんにくを食べて、リポビタンDを飲んでいることです。これが元気のひけつなのかなぁと思っています。四つ目は、毎日、かんこくドラマを観ていることです。ひいおばあちゃんは、としなのに、かんこくドラマを観ているなんて、びっくりです。だから、としのわりには、元気なのだと思います。

でも、そんな元気なひいおばあちゃんも、やっぱり、こしがまがって、小さいです。耳もだんだんと、とおくなってきています。私は、いつも、ひいおばあちゃんの近くに行って、ひいおばあちゃんの聞こえる声の大きさで話しています。ひいおばあちゃんと同じ目線で、また、声が聞こえやすい近くで話すことで、安心してひいおばあちゃんが聞くことができるからです。いつも、「大きくなったな、学校はどうだった。」と聞いてくれる、ひいおばあちゃんがとても大好きです。

これからも元気に長生きしてほしいです。私も、ひいおばあちゃんを支えてあげて、協力していきたいと思います。

優良賞

猫の思いやりから学んだ 助け合うということ

北園小学校　五年　田中龍翔

ぼくには弟と呼べる、とても大切な飼い猫がいます。ぼくが二歳の時に拾った子です。とてもかしこくて、絶対に道路の方へは行きません。おさし身が大好きで、いつもマグロの赤身をねだります。

ぼく達が家を留守にしている日中は、いつもガレージで昼寝をするのが日課です。だから、学校から帰ったら、僕の足音や家の車の音を聞きつけて、走ってきてくれます。いつもニャオニャオ鳴くだけだけど、ぼくは、

「おかえり。今日は学校から帰るの遅かったんじゃない？」

などと話してくれるように感じます。きっとレオには、言葉や気持ちが通じている気がします。だからぼくは、毎日学校に行く時には、お父さんお母さんのほかに、レオにもきちんと〝レオ、行ってくるね。レオも気をつけて行ってきてね。〟と伝えるようにしています。

一年前の六月、ぼくたちを本当の家族のように大切にしてくれていた、おとなりのおじさんが亡くなりました。仲の良いご夫婦だったので、おばさんはとても悲しんで、見る見るうちにどんどん元気がなくなっていきました。そのころから、ぼくが学校から帰っても、レオが出むかえてくれない日が増えてきて、夜、ぼくが寝る時間にようやく帰ってくるようになりました。

「レオ、どこに行ってたんだよ。心配するじゃないか!!」

ぼくは夜遅くに帰ってきたレオに、少しきびしい口調でお説教しました。レオは、耳をふせて、ちょっと不きげんそうにプイッと寝床に入っていきました。

それから何日か経ったころ、おとなりのおばさんが来て、こう言いました。

「最近ね、レオちゃんがわが家に遊びに来て、私がぼうっとしていると、足元でスリスリしたり、本を読んでいると、そばでお昼寝したりしてるのよ。それに、いつもなら夕方に帰るのに、この前私が泣いていたらね、ずっと私の手を舐めてくれていたのよ。レオちゃんは本当にいい子ね。」

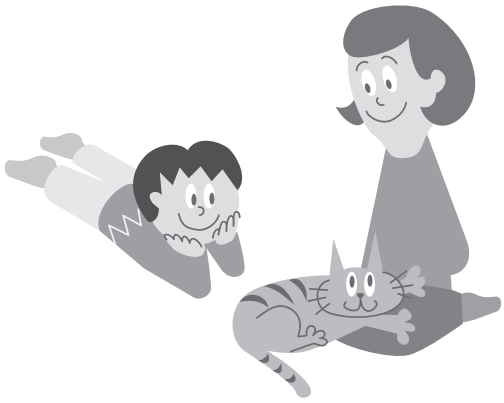
ぼくはびっくりしました。道路が大きらいなレオ。ぼくの家は少し道路から離れているけれど、おとなりの家は大通りに面しているので、レオにとっては行くのがいやなはず。それなのに、おじさんが亡くなってからほぼ毎日のように、悲しんで泣いている、一人ぼっちになってしまったおばさんのそばに行っていたなんて。ぼくの前ではこれまで通りにおばさんは笑っていたから、きっと大丈夫って、勝手にきめつけて安心していました。でも、レオはおばさんの辛さやかなしさを見抜いていたんだと、とても考えさせられました。

レオは最近、ぼくたちが起きると、おとなりの家に出かけ、おばさんの近くにずっといるそうです。そして、おばさんやぼくが寝る時間に合わせて、わが家へ戻ってくるようになりました。

レオがおとなりのおうちに行くようになり、これまで以上に、おばさんと話す機会が増え、レオをお願いするあいさつを口実に、ぼくたち家族で、おばさんの顔色や体調を見守っています。

ぼくは、猫のレオから、相手を思いやる行動と、泣いていたり元気がない人をいたわる優しさを学びました。

この気づきと学びを大切にして、思いやりやたすけあいの大切さを、いつか、自分の子供たちにも伝えたいと思います。



優良賞

相手を思いやることの大切さ

南小学校　五年　髙村陽葵

四年生の時、福祉体験をしました。二人組で車いすに乗ったり、おしたり。白杖を使ってアイマスクをして、階段を上り下りしたり。実際に体験してみると、大変だということが分かりました。しかし、時がたつと大変だったことを忘れ、いつも通りの生活を送っている自分がいます。

私のおじいさんは、腰とひざが悪く手術をしました。長い入院生活は、コロナのために面会することができませんでした。おじいさんは、とても心細い思いをしたのでしょう。電話の声は、いつも少し元気がなかったです。「年をとると、必ずどこかが痛くなったり、悪くなったりするのかな」という気持ちになりました。

退院してからは、おじいさんは杖を使わないと歩くことが、難しくなりました。「痛い、痛い。」と顔をしかめたり、とても辛そうでした。「大丈夫?」と声をかけることはできても、手伝いの仕方が分かりません。

その時、福祉体験のことを思い出しました。

「そうか、聞けばいいんだ!!」

「手伝ってほしいことを…」

それからは、階段は、後ろから腰を押したり、歩く時は、ゆっくりいっしょに歩いたり。家の中では、郵便物を取りに行ったり、ゴミ捨てをしたり、冷蔵庫から冷たい飲み物を出したり。

できることは、たくさんあることに気がつきました。特別なことをする必要はなくて、いつも通りでいいことが、分かったような気がしました。

おじいさんは、「ありがとう。」と言って、喜んでくれます。私もとてもうれしい気持ちになります。

考えてみると、私がかぜをひいたり、部活で体が痛くなった時、家族みんなが心配して、いつもよりたくさん声をかけてくれました。それがうれしかったので、これからは私が体の不自由な人にも、同じように声をかけようと思います。相手のことを、思いやる気持ちがあれば、むずかしいことはないと思うからです。

このことから私は、おじいさんに接する時に、気持ちが楽になりました。私は、これから勉強をがんばります。好きなことに向かって努力します。だから、大きくなったら、おじいさんを旅行につれて行ってあげたいです。それまで、ずっとずっと長生きしてください。

いつもやさしくて、おもしろいおじいさんが、大好きです。

優良賞

助け合いの輪、広げていこう。

西小学校　五年　音道（おとみち）　岳（がく）

ぼくが四年生のころ、初めて運営委員会というものに加わりました。初めてやる仕事もだんだんとふえてきて、仕事のやり方が分からないとき、近くにいた六年生がその作業の手順を教えてくれました。今はもう、その人は中学生になったので学校では会えないけれど、とても感しゃしています。これから、どんどん新しい人が入ってきたときに、ぼくも、その六年生のように教えてあげたいです。

この経験から、助け合いとは、何かについて考えました。まず、身近なところで、「助け合い」はあるか考えました。例えば、元気がない友達がいます。なぜ、元気がないのかを気にして、やさしく声をかけることや、自分が落ちこんでいるときに友達が声をかけてくれたことは、助け合いだと思います。次に、友達がいそがしくてこまっていたときに、手伝ってあげること、また自分がいそがしいときに手伝ってもらうことも、助け合いといえると思います。

逆に、助け合えていない場面も考えてみました。例えば戦争です。戦争では、相手の国の人達の命をうばい合う、「殺し合い」をしています。苦しく、悲しい思いをしている人々のために、他の国々から支援をして、食べ物や毛布などを届けています。これは、助け合えています。しかし、親や友達、大切なものをなくした人々は、どんなに食べ物をもらっても、どんなに毛布をもらっても、心のきずは治りません。だから、戦争はやってはいけないと思いました。

助け合いの種類はたくさんあります。ただし、その人の心まで救って助け合いにつなげることは、とてもむずかしいと思います。その人にどのように接したらいいか、どう手伝えばいいか、その人の心を完全に読み取ることはできません。だから、自分のできるはんいで、身の回りの人の助けになる努力を一つ一つしていき、助け合いの輪を、広げたいです。

助け合いとは正反対の戦争を学んで、人の心についたきずは何をしても、完全には治らないということが分かりました。だから、人がいやがることは、絶対やらないようにしたいです。この考えこそが「助け合い」の基本だと、ぼくは思います。

優良賞

友達との協力と助け合い

西小学校　六年　畠山（はたけやま）　大河（たいが）

「もう時間だよ。」

と、ぼくは友達に言いました。

「あ、本当だ。ありがとう。じゃあ、次のところに行こう。」

と、友達は言いました。ありがとうと言われて、ぼくは役に立ててうれしかったです。

これは、修学旅行の自主研修での出来事です。修学旅行前に計画した時間通りに目的地を回れるように、班の皆で時間を確認し合い

ました。その結果、時間通りに目的地に着くことができたし、集合時間にも間に合うことができました。ぼくはホッとしました。なぜなら、集団行動では一人でも遅れると、皆に迷惑をかけてしまうからです。ぼくは班の皆で助け合ったり時間を確かめ合ったりして、時間を守れたので良かったです。

そしてぼくはもう一つ夏休みに体験したことがあります。青森県十和田市、岩手県花巻市、神奈川県平塚市の小学生が花巻市で自然体験をする「友好都市少年少女自然体験交流事業」に参加しました。最初は、「うまく友達ができるかな」や「相手をきずつけないように話せるかな」、「周りに合わせて行動できるかな」と不安でした。でも最初の友達は、初日の昼食を一緒に食べた十和田市の小学生で、すぐに仲良くなれました。その後、同じ班になった花巻市と平塚市の小学生に自分から自己紹介をして、好きな食べ物などの話をして友達になりました。最初は不安だったけど、友達ができて安心しました。

この班の皆で協力できたことが二つあります。

一つ目は、キャンプファイヤーの出し物です。出し物で何をやるのかや役割を皆で仲良くけんかをせずに協力して決めました。出し物練習では意見を出し合って真剣に練習した結果、ぼく達の出し物は大成功でした。

二つ目は、魚つりの時です。ぼくは魚つりをするのが初めてで魚がつれるのかなと心配でした。でも同じ班につりをしたことがある子がいて、班の皆にさおを上げるタイミングや、エサの付け方を教えてくれました。教えてもらった通りに班の皆でエサを付けてあげたり、かけ声をかけたりして協力しました。その結果、一人二ひきずつつれてうれしかったです。中には、銀ブナをつった子もいて、ぼくもいつかつってみたいと思いました。

ぼくは交流事業を通して、協力することが大切ということが分かりました。一人だとできないことも、皆で協力すれば、いろいろなことができると学びました。そして友達と協力して楽しい思い出が作れました。

佳作

思いやりがいっぱい

西小学校　五年　工藤凛子

私は、お母さんやおじいちゃんが暑い中畑で草取りや畑仕事をしている時に、水を持っていったら、「ありがとう。」と言ってよろこんでくれたり、おばあちゃんが熱を出した時に、冷やしてあげたら、「ありがとう気持ちいい。」と言ってよろこんでくれたりしたことが心に残っています。

このように相手のことを考えてしたことで、「ありがとう。」と言ってよろこんでくれたことがとてもうれしかったので、これからも続けていきたいです。

私も分からない問題があってなやんでいた時に、家族や友達が分かりやすく教えてくれたり、かぜで熱をだした時に、家族がかん病してくれたことがとてもうれしかったです。だから他の人にこのようなことをしてあげたいと思いました。

みんなが喜ぶことを、たくさんしていきたいです。

また高れい者の方や体が不自由な人、困っている人を見かけたら、まよわずすぐに助けられる人になり、たくさんの人を助けて、人と人とのふれあいを大事にして生活をしたいです。

そしてだれもがやさしく接することができ、「思いやり」の心があふれる世界であってほしいと願います。

佳作

ぼくのおじいちゃん

西小学校　五年　小笠原（おがさわら）　結翔（ゆいと）

ぼくのおじいちゃんは冬に亡くなりました。いっしょに住んでいないおじいちゃんだけど、病気が分かってから余命せん告を受けて三か月と言われていました。でも一か月で亡くなってしまいました。その間なんどかおみまいに行きました。はじめは、ふつうに歩けていたし、食べてもいました。会話もいつも通りでした。最後のおみまいの時は、ベッドにねたきりになり、体を自分で動かすこともできなくなってあまり食べられなくなりました。おじいちゃんの元気がなくてぼくはかなしくなりました。それから数日後に亡くなってしまいました。家族みんなたくさんなきました。

あとからおばあちゃんやおじさんの話を聞いたら、おじいちゃんは病気が分かってからも家族のために仕事をしていたそうです。いきがくるしくても、体がしんどくても仕事をがんばったそうです。おじいちゃんはとても家族思いのやさしいそんけいできる人です。

おばあちゃんもおじいちゃんのおせわをしている時、とても大変そうでした。一日中みなければいけないのでたくさんねることができなかったり、おじいちゃんの体を動かしたり移動したりする時、体にふたんがかかりあちこち体がいたくなったそうです。おばあちゃんもおじいちゃんのことを思っておせわしていたことが分かりました。ぼくもおじいちゃんとおばあちゃんのように家族を大切にしたいです。

佳作

友達をきずつけないように

西小学校　五年　漆畑（うるしはた）　悠介（ゆうすけ）

まず考えていたことは、どうすれば相手がイヤだと思う言葉を言わないようにできるかです。なぜかというといつも友達とゲームをしてもり上がってしまった時に、つい相手がイヤだと思う言葉を言ってしまったことがあるからです。その後すぐ仲直りはできたのに、なぜか後かいが残ってしまうのです。他にも何か物をこわしたり家のかべをけって怒られた時にも、こんなことをやらなければ良かった、こんなことを言わなければ良かったと後かいしました。次は、こんなことをしないようにしよう。それで数か月たつと、またそのことを忘れてしまい、また前と同じことを言ってしまいます。なので、その言ったことを忘れないようにするのではなく、元から相手がイヤだと思う言葉を言わない、やらないと考えれば良いと考

えました。もり上がりすぎても、相手がイヤだと思う言葉を言わないようにすることが、できるので、元からやらない方が良いなと考えました。次に自分からイヤなこと言ったときは、自分の方も後かいするし、相手に言われてしまった時は、相手も自分も悲しくなるので相手がイヤだと思う言葉は言わない方が良いと思いました。それですごいなぁと思ったことをほめたりするのは良いことがほとんどですが、自分が良いと思った言葉でも、相手にとっては嫌な言葉とにんしきする場合があり、ただただ何かを言うよりも、「〇〇がすごいね」「〇〇が上手だね」と言葉を少し付け足した方が自分の伝えたいことが相手に伝わりやすいと思いました。つまり、体験したことをふまえてただ、たんじゅんに言葉で表現するよりも、少し言葉を付け足した方が、自分の方からは、細かくどこが上手なのかを表現することができるし、相手側も、こんな良いところを言ってくれたり、相手は、工夫したところをこんな感じが良いとほめてくれるとどちらもうれしくなるのだと思います。

最後に願いたいことは、相手がイヤだと思う言葉を無くしたいことです。でもその言葉は、学校でも、このことについて、ちくちく言葉について言わないようにしても、話していると中でつい言ってしまうことがありました。

でも今はやれてる人もいるけど、やれてない人もいるので、今はやれてない人がなるべくへっていくようになってほしいです。でも、もし悪口などが本当に無いようになったらどのような感じになるのかを少し見てみたいと思いました。それで、自分が少しでも悪口を言わないようになったら、自分の周りからの言われ方や、態度なども変わるとしたら、急に変えるのではなく、少しずつ態度を変えた方がそのことにもなじみやすいし、周りからもあまり不思議には思われないので少しずつ変えた方が良いと思いました。つまりふれあいを良くする、つまり仲を良くするのは、相手がイヤな言葉を言わないようにすることと、ほめる言葉を言った方が良いと思いました。

佳作

思いやりの輪

西小学校　五年　川村暁翔

ぼくは、学校で運営委員として、活動しています。運営委員会は、全校が思いやりあふれる学校にするという目標やめあてをもっています。だから、全校が思いやりあふれるように今は、いじめゼロをめざしています。

次にぼくが思いやりについて思っていることは、思いやりは、いじめゼロにもつながるということです。なぜなら、思いやりがあふれるようになれば、人は、自然と悪口やかげ口を言われなくなったり、ぎゃくに人を助けようと思うことが多くなったりするからです。ぼくが筆箱を落として、えん筆を拾っていた時、クラスの友達がえん筆を拾うのを手伝ってくれたり、「大じょうぶ。」と声をかけたことを体験したことがありました。なのでぼくは、思いやりがあふれれば、いじめゼロにつながると思います。

このように、思いやりはいじめゼロにもつながります。

最後に、ぼくの願いは全国の小学校や中学校、高校、大学、社会

で思いやりがあふれてほしいということです。さっきもいったように、思いやりがあふれれば、学校やしょく場でのいじめや差別ゼロにつながるからです。思いやりは、ふんいきも良くなり、だれにでもやさしく接したりだれとでも仲良くなったり、思いやりがあふれることでまだまだ、いっぱい、良いことがあると思います。なので、ぼくは、全国いや全世界で思いやりの輪を広げていけたらなと思います。まずは、自分の西小学校から輪を広げそこからだんだんと思いやりの輪が広がり、かなしい戦争や争いが、起こらなくなっていったらうれしいです。これからも、何日、何年たってまででもいいので、何年かたったその日は、全世界の人達が困っていたら、みんなで助け合って、全世界にたくさんの思いやりの輪が広がっていっていると思います。今日も自分の友達、家族の人達を大切にしていきたいです。

佳作

ふれあいを通して

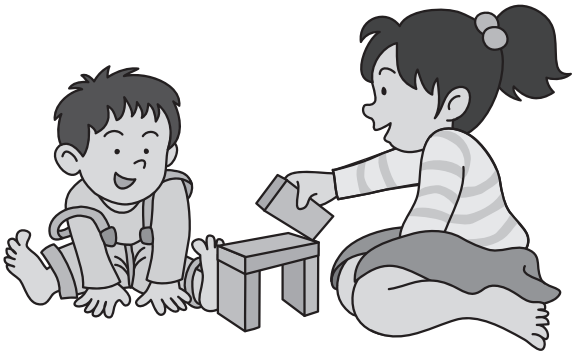
西小学校　六年　亀田（かめだ）　澪（れい）

「可愛いね。」

今から約七年前。ずっと楽しみに待っていた私の弟が産まれました。今まで一人で遊んだり、お出かけをしたりしていました。だからとってもうれしくて、まだ保育園に通っていた私はおばあちゃんと毎日、弟に会いに行っていました。弟が家に来てからたくさん遊んであげたり、お世話をしてあげました。最初は、何を考えているのか分からなくて泣かせることが多々ありました。だけど、弟とふれあっていき、一年二年経つと相手の気持ちを考えることができました。また、私と同じ保育園の友達・先生方・地域のみなさんとも私は、たくさんふれあうことができました。バスに乗って遠足へ行ったり、夏祭り会で老人クラブの方と、ぼんおどりをおどったり、クラスのみんなとおゆうぎ会のおどりを練習したりたくさんのふれあいができて楽しかったです。

今も私は、西小学校でたくさんのふれあいをし、成長していると思います。学校では、一年生をむかえる会、六年生を送る会、委員会活動、クラブ活動などの場面で積極的に活動し、学校をより良くしようとしています。また、学校外での、習い事としてやっているサッカーでも他のチームや、他県のチームとふれあいをしています。

最後に、私は友達や家族、地域の人、他のチームの人、たくさんの人達と関わり、ふれあいをすることは、とても大切だと思います。なぜかというと、ふれあうことは心の成長や栄養になると思うからです。これからも、たくさんの人との出会い、関わりがあると思うので、それを大切にしてたくさんの人達とふれあっていきたいです。



中学校の部

最優秀賞

人とふれあうということ

三本木高等学校附属中学校　三年　金澤璃奈

私は人とふれあうのが苦手だ。思わず変なことを話してしまい、相手に引かれてしまうのではないか、気まずい空気になってしまうのではないか…誰かと面と向かって会話しようとする度、そのようなことばかり頭に浮かぶ。それのくり返しなので、人とコミュニケーションをとる機会もどんどん減っていく。

だから今年の夏休みも、友達と出かける約束は一つもせず、家でゴロゴロと過ごす予定であった。

だが、つい数日前のことである。盆休みに入った父が、「母の実家に帰省しよう」という提案をしたのだ。母の実家は福島県。高速道路に乗っても、車で片道八時間。高速道路の料金やガソリンの値上がり、八時間ずっと車に乗り続ける等、さまざまな事情で、母自体は帰省に反対していた。しかし、どうしても行こうと父の意見に押し切られ、結局家族皆で行くことになった。なぜ自身の実家でもない父が母の故郷へ帰省しようとしたのか。これには理由があった。

それは、母の祖父、私の曾祖父が病気にかかり、今年から老健施設に入所したからである。最後に私が曾祖父と会ったのは二年前。父曰く「大きくなったひ孫の顔を見せてあげたい」のだそう。

そんな父の両親、私の祖父母は、私が小学生のころに、亡くなっている。父方の両祖父母とは最期まで交流があったものの、私の中の思い出はうすれつつある。父は、自分の両親に、中学生の孫の姿を見せられなかったことを、きっと悔やむ気持ちがあるのだろう、と私は勝手に考えていた。

半日車に乗り続け、母の実家に着いたのは深夜。夜もおそいというのに、母方の祖父母は起きていて、温かく迎えてくれた。私と弟は、先に寝室に行き、大人達は軽い晩酌。引き戸のすき間から聞こえてきた話は、「曾祖父はボケておらず、健康的に生活していること」、「病気の完治は難しいこと」だった。

次の日の朝。普段は食べないような立派な和食をいただいた。祖父母に最近のことをいろいろ聞かれながら。正直、このやりとりも少し緊張した。離れて暮らしている孫のことがそんなに気になるのだろうか。この時の私は、まだ心の中に？を浮かべていた。

朝食を食べ終わるとすぐに家族と祖父母で一つの車に乗り込み、祖父の祖先の墓参りに行った。おそらく祖父の親戚と会った記憶はないが、「おはようございます。私が子孫です」と思いながら手を合わせた。

次に来たのは、曾祖父のいる老健施設。面会時間丁度に行ったのだが、しばらく待つことになった。どうやら私達の前の面会が長引いているらしい。「きっと親子の面会なのだろうな。それなら長くなるだろう」とぼんやり考えていた。

そしてついに私達の面会の番になった。両親にできるだけ曾祖父の近くに座るように促される。「関わりがあるのは大人達ではないのか？」そうして私達は、二年ぶりに曾祖父と再会した。車椅子に座り、体につながれた細いチューブの袋を持った曾祖父。だが確かに目は輝いていて、二年前の面影も残っていた。はじめに母親が声をかけると、曾祖父はしっかり母親を見て、「大きくなったなぁ！」

ととてもうれしそうにした。それからひ孫の紹介。曽祖父は私達を見ると「大きくなって～。」と喜んでいた。それからは、娘である祖母の質問を中心に、施設でのこと、私達のことをいろいろ会話した。私はひたすら聞き手にまわり、声を出すことはなかった。が、曽祖父の話を聞いている間、両親、祖父母の顔が、話している曽祖父も、とても穏やかで、幸せそうだったのが今も印象に残っている。会話の内容は、「施設は個室になっていて快適だ」といった、他愛もない、日常でもできそうな会話であった。

あたたかい時間はあっという間に過ぎていき、とうとう面会が終わる時間になった。別れるとき、曽祖父が

「みんな、元気でなあ。」

と明るい声で言った。この一言を聞いた私は、心がじんわりと温かくなったことを感じた。「曽祖父は、本当は一番元気でないのは自分のはずなのに、どうして私達を気づかえるのだろう」というふわふわした気持ちの疑問が浮かび、「両親達は、どうして私と弟も連れて福島まで面会に来たのだろう」という疑問が静かに消えていった。ふれあいがあっても、なくても、私はちゃんと曽祖父の家族だったんだ。

私は人とふれあうのが苦手だ。だが、人と人とのふれあいで私は生まれ、私も人とふれあいながら毎日生きている。苦手を全部無くしてしまおうとは思わないし、大人になってもずっと苦手かもしれない。でも、人とのふれあい、つながりのあたたかさを知った私は、きっと何かが変わるだろうと、考えた。

講評

冒頭に語られる人とふれあうのが苦手だとの思いが、遠く離れた場所で暮らすあまり関わり合うことのない曾祖父との面会を機に、何かが変わるのではないかとの思いを抱くこととなります。構成が秀逸であり、話の展開に思わずのめり込みます。人とのふれあいの大切さが、素朴でコミカルな表現により、一層心に染みます。

優秀賞

あるおばあちゃんとの出会い

三本木中学校　三年　竹ケ原（たけがはら）　麗（れい）　愛（ら）

今年の三月、卓球部の活動を終えた私は友達と二人で下校していた。夕方の六時半を過ぎたころだったろうか、あたりはすっかり暗くなっていた。すると信号待ちをしていた私たちに、リュックサックを背負った一人のおばあちゃんが話しかけてきた。

「すみません、ユニバースってどこだべ。」

それはすぐ近くにあるスーパーだったので、私たちは案内をすることにした。しかし私はふと、「こんなに暗くなってからおばあちゃん一人でよくわからない場所に出かけたりするものかな」と疑問に思った。

「おばあちゃん、ユニバースに何しに行くんですか？」

そう尋ねると、おばあちゃんは困ったような顔で

「何をしに来たのかわからない。」

と答えた。そして

「官庁街通りってどこさあるべ。」

と続けて尋ねてきた。

ユニバースに行きたいのではなかったのか。官庁街通りは反対の方向だ。

「おばあちゃんユニバースと官庁街通り、どっちに行きたいの？」と尋ねると、官庁街通りの方だと言うので、私たちは指をさしながら説明した。でも説明しながら不安そうなおばあちゃんの様子に心配になってきた。案内して、連れて行ってあげようか。しかし帰宅するはずの時刻は過ぎているであろうから、私たちの家の人も心配するだろう。

これは大人に頼った方がいいな。そう判断した私たちは、その場から近い私の家に助けを求めることにした。私が呼びに行っている間、友達におばあちゃんの相手を頼んだ。友達も一人で相手をするのは不安だろうと思い、私は家まで急いで走った。

家に帰ってくるなり口早に事情を説明する私の話を、両親は冷静に聞いてくれた。そして両親を連れてさっきのおばあちゃんのところに戻ると、待ってくれていた友達はほっとした表情を見せた。そしておばあちゃんの対応をはじめた両親に、

「私も何かお手伝いすることはありませんか？」

と尋ねてくれたが、夜遅いこともあり両親は

「帰った方がいいよ、ありがとうね。」

と声をかけていた。おばあちゃんに会ったのが私一人ならどうにもできなかったかもしれない。

「本当にありがとう、またね。」

と伝えた。

「こういうときにどうしたらいいか私も親に相談してみます。」

友達は私の両親にそう言うと、こちらを気にしながらも帰っていった。

両親とともに官庁街通りまでおばあちゃんを連れて行ったが、おばあちゃんは「わあの家がどこだかわからない。どこさあんべ。」と繰り返すばかりだった。そこで私たちは、警察の方の手を借りることにした。そのあと間もなくおばあちゃんは、家族の人たちに再会することができた。家族に会えて安心したようなおばあちゃんの様子を見て、私はすごくほっとした。ほっとしたのも束の間、警察の方に事情を聴かれたので説明しなければならなかった。

その後おばあちゃんの家族の人から聞いた話では、おばあちゃんの背負っているリュックには、迷子になったときにわかるよう、連絡先が書いてある紙が入っているそうだ。おばあちゃんに許可を取ってリュックの中を見せてもらえば良かったな、と思った。

このおばあちゃんとの出会いから、私は気になったことはすぐに調べたり聞いたりした方がよいことや、自分たちで対応できないときはすぐに大人の人や場合によっては警察の方に頼ることも大切だと考えた。

私たちのしたことはささいなことかもしれないけれど、友達と二人で、誰かのために何かをしようと動いたことを、忘れないようにしたいと思う。

講評

認知症と思われるおばあさんとのやりとりが、緊迫感をもって語られています。困っている人のために力になりたいという思いは、時に、人の行動に力強さを与えてくれるようです。この貴重な経験は、今後の人生の指針となるのではないでしょうか。会話文が巧妙に織り交ぜられており、臨場感あふれる作品です。

優秀賞

ずっとそばにいたい

甲東中学校　三年　梅内（うめない）　優（こころ）

神奈川県に在住のおじさんに女の子の赤ちゃんが生まれたのは二年前。私が小学六年生の冬。ちょうどコロナ禍の時だった。

スマホで送られてきた元気な赤ちゃんの写真。画面いっぱいに満面の笑顔を向ける私のいとこ、なっちゃん。ぎゅっと抱きしめたい。一緒に遊びたい。一瞬でなっちゃんのことで頭がいっぱいになった。早くなっちゃんに会いに行きたい。

けれど、その願いはしばらく叶わなかった。新型コロナウイルスが猛威を振るっている真っ只中。緊急事態宣言により行動は制限され、それから私がなっちゃんに会いに行けるまで、結局二年の歳月が流れた。ときどき、おじさんから送られてくるなっちゃんの写真や動画。テレビ電話等で元気ななっちゃんの笑顔を見る度、「早く会いたい」という想いだけが大きく膨らんでいく。会えない間の二年という時間は実に残酷な影を私の心に残した。生まれたばかりの感触を両手に感じられないまま、気がつくとなっちゃんは一人で立って、歩けるようになっていた。そして上手におしゃべりもできるようになっていた。

一日も早くなっちゃんに会いたいと願う私の想いがついに叶う日がやってきた。中学三年生の夏休み、家族で神奈川のおじさんのもとへ旅行することになったのだ。

空港へ車で出迎えに来てくれたおじさん家族。後部座席のチャイルドシートにちょこんと座っていたのは、私が会いたくてたまらなかったなっちゃん。すぐさまなっちゃんの隣へ乗り込み、

「こんにちは。」

と挨拶すると、最初はビックリして泣きそうにしていたなっちゃんが、恥ずかしそうに、でも一生懸命に応えてくれた。おじさんが

「テレビ電話のお姉さんだよ。」

と紹介すると、なっちゃんは

「おねしゃん。」

と笑って私の手を握った。小さくて温かい手。想像していたよりもやわらかくて白くて、思わず息をするのを忘れそうになりながら、その手をぎゅっと握り返した。その後おじさんの家まで一時間、私達は仲良く手をつないだまま、車の中で沢山おしゃべりをした。

それから三日間、おじさんのお宅にお世話になった。おじさん家族と水族館へ行ったり、食事に出かけたり、近所の公園を散歩したり。何気ない日々だったけれど私にとっては全てが夢のようにキラキラ光って見えた。

まだ二歳で、一人で靴下を上手くはけないなっちゃん。どうしても靴下のかかとの部分が足の甲にまわってきてしまう。必死に靴下と闘っているなっちゃんが「おてちゅだいして。」と言って私に甘えてくる瞬間、それが可愛くて、とても嬉しかった。何度だって手伝ってあげる。今は小さくてできることが少なくても、大きくなるにつれてできることが増えていく。なっちゃんの成長がとても楽しみである反面、なんだか少し寂しくもある。私の助けが必要でなくなる時がいずれおとずれるのだろう。

そう感じた時、私はふと、母の言葉を思い出した。なっちゃんが生まれてすぐの時だ。

「あなたがなっちゃんぐらいのころ、お母さんはあなたに、大きくなるな、もう少しの間小さいままでいてって言ってたものよ。」

初めてその言葉を耳にした時、私はショックでたまらなかった。私は大きくなってはいけなかったのか。母は私の成長を喜んではいなかったのだろうか。

ところが、なっちゃんと一緒に過ごしていくうちに、母の言葉の意味がようやく分かってきた。たった二年会えなかっただけで、なっちゃんはトコトコ歩き出していた。公園の滑り台を一人で登って滑り下りることだってできる。あと何年か経てば、ランドセルを背負って小学校へ通うだろう。母は子育ての時間が思うよりも短いものだと気付いていたに違いない。一人で何でもできるようになることは嬉しいけれど、どこか寂しさも一緒に抱いてしまうのかもしれない。今、私がなっちゃんを見て感じる嬉しさと寂しさは、私の母が感じてきたものと似ている気がした。

私は沢山の愛情をもらって育てられてきたことを改めて実感した。今度は私がなっちゃんのそばにいて幸せにしてあげたい。なっちゃんが悩んだ時に、いつでも私が助けてあげられたなら、どんなに喜びになるだろう。そのために、私ももっと沢山の経験をして限られた時間の中、いつでも会いに行ける準備をしたい。

先日、神奈川のおじさんから嬉しい知らせが届いた。もうすぐなっちゃん宅に弟が生まれるそうだ。今度は生まれたらすぐに抱っこしに行きたい。次になっちゃんに会いに行ける日が今から待ち遠しい。

なっちゃん、一緒に赤ちゃんと沢山遊ぼうね。

講評

生まれたばかりの赤ちゃんに、会いたくても会えないもどかしさが勢いをもって伝わってきます。そして、ようやく会えたシーンには、思わず胸が熱くなります。赤ちゃんの成長の早さに驚くと同時に、寂しさを感じるなど、心情表現が豊かです。人の命の誕生を心の底から喜びたくなる作品です。

優秀賞

私の大好きな祖母

十和田中学校　三年　岡田恵弥

「やっほー。」

私は祖父母の家の中へ入った。一週間ぶりに会う。祖父母はいつも通り「よっ。」と言って私たちを迎えてくれた。もう夕ご飯の準備はできていた。みんなでテーブルを囲み、ご飯を食べながら、いろいろな話をして盛り上がった。私はこの時間が好きだった。そして、こうして過ごせることが当たり前だと思っていた。だが、そうではないということをこの後知ることになった。祖母から突然、肺がんになったという知らせを受けた。私は驚きのあまり言葉がでなかった。

それ以来、祖母は入院と退院をくり返し、何度も手術をした。そ

れでもがんは進行していき、肺だけでなく他の器官へも転移していった。そのため、入院期間は長くなり、コロナの影響で面会もさせてもらえなかった。祖母はずっと一人で闘っていた。度重なる手術に面会のできない入院。祖母には体力だけでなく、精神的にもかなりの負担がかかった。祖父は、これ以上、祖母に寂しい思いをさせたくないと考え、自宅療養が始まった。このころには、もう祖母は歩くのも困難になり、好きだったサテライトでの仕事にも行けなくなっていた。家族や親戚たちが今までお世話になった祖母のために介護やサポートをした。私も休日は、できるだけ祖父母の家へ行き、会うようにした。

だが、ある日、祖母の病態が急変し医者からは、もう長くないと報告を受けた。私はそのことを母から知らされた。そのため、私は休日、祖父母の家へ行く時は、会うのはこれが最後かもしれないという気持ちで行った。祖母の様子を見に行くと、祖母は変わりはてていた。目の焦点はあっていない。いつものように話しかけても言葉は話せなくなっていた。また、ときどき、呼吸することを忘れ、数秒呼吸をしないときもあった。母は、祖母に私が明日、期末テストがあるということを話した。祖母は、「うー」と痰を絡ませた声で返事をした。私はそんな祖母の姿を見ていられず、その場からすぐ立ち去ってしまった。次の日のテストは頭がまわらず、なかなか進まなかった。

テストを終えた二日後の深夜、祖母は静かに息をひきとった。私は朝、知らせを受けた。その日は、頑張って学校へ行ったものの頭は真っ白で、友達の前で笑顔でいるのが必死だった。学校が終わり、急いで祖父母の家へ向かった。家の中へ入ると、祖母が使っていたベッドは片付けられ、線香や白米があげられている台の後ろには、白い生地の屏風があった。あの向こうに祖母がいる。早く行かないといけない。分かっていた。けれど、足がふるえて行けなかった。母に連れられ、やっと祖母のところへ行くことができた。祖母を見た瞬間、私は涙が止まらなくなった。それと同時にいろいろなことを考え思い出した。祖母はいつも笑顔で明るく誰に対しても優しい人だった。私は幼いころからおじいちゃん、おばあちゃんっ子で、休日のお出かけや旅行など何をするにも祖父母についてまわっていた。買い物をする時、わがままで頑固な私は買ってもらえないものがあると、買ってもらうまでその場から動かず困らせていた。また、風邪をひいた時もずっとそばにいてくれたのは祖母だった。たくさん可愛がってもらって大切にしてくれていたのに、恥ずかしがってありがとうと伝えていなかった。祖母のお葬式は子どもから年配の人までたくさんの人が祖母の死を悲しんでいた。私は、こんなにたくさんの人から愛されてきたんだと、祖母の人柄の良さを改めて感じた。

祖母が亡くなってから五か月と少し。私は、今、受験勉強の真っ最中だ。祖母のことをきっかけに将来は医療系の仕事に就きたいと考え、救急救命士になりたいと思っている。祖母のように生きたくても生きられない人がいるということを頭に入れ、今ある命を大切に生きていきたい。そして、

「みこばあば。これまで私を大切にしてくれてありがとう。」

講評

大好きな祖母が病床に伏し、やがて亡くなるまでを切々と描きました。祖母から受けた恩を振り返るとともに、祖母の人柄の良さを

改めて実感しています。祖母への溢れる思いは、祖母が筆者に抱いた愛情と比例しているかのようです。最後の一文が、天国の祖母に伝わることを願わずにはいられません。

優良賞

何気ない日常

三本木中学校　一年　對馬佳音（つしまかのん）

私と祖父は、一緒には住んでいないが、車で十分くらいの距離に住んでいるので、会おうと思えばすぐに会える。祖父は七十七歳とは思えないくらい元気だ。趣味でやっている畑仕事で採れたたくさんの野菜をもらいに行ったり、一緒にご飯を食べに行ったり、習い事の送迎をしてもらったりと、それが当たり前のように過ごしてきた。

でも、去年、そんな当たり前が急に当たり前ではなくなった。

いつものように学校から帰ったら、

「じじが入院したんだよ。」

と弟があわてて言ってきた。何日か前から胸が苦しかったのに、無理をしていたらしい。とうとう我慢できなくなって病院にいったら、即入院となってしまった。（え、昨日、私のマラソン記録会の応援に来ていたよね。頑張ったなって言ってくれたよね。）と、最初は信じられなかった。

「コロナだから、お見舞いはできないんだって。」

と母に言われ、なんとも言えない不安な気持ちになった。（もう、会えなくなるなんてことないよね。私、昨日、頑張ったなって言われたとき、どんな態度だったっけ。）そんな思いが次々とめぐってきた。

祖父が入院する前、会えなかった日は、必ず電話がきていた。

「今日はどうだった。楽しかったか。」

というような、他愛もない用件だ。忙しい時や疲れている時にその電話がかかってくると、「普通。」とか「特にない。」というようなそっけない返事で終わらせることもあった。祖父の家に行って、ご飯をごちそうになっても、黙って食べてそのまま、遊びに行ったこともあった。祖父は少しあきれたような、さみしそうな顔をしていた。

そんなことが頭の中をかけめぐり、後悔することばかり思い出された。

入院して三日目に祖父から電話があった。病院から、許可が出たそうだ。久しぶりの祖父の声は弱々しくて、いつもの祖父とは全然違った。短い時間だったが、私は一生懸命話を聞いた。できるだけ明るい声で話をした。話していくうちに祖父の声も少しずつ元気になったような気がした。次の日からも毎日電話がくるようになった。私も弟も学校であったことをたくさん話した。祖父も楽しそうに話していた。

「お前たちと話すと、元気が出るよ。」

と、言ってもらったのが嬉しかった。

祖父は無事、退院し、無理はできないが、元気に過ごしている。私は中学生になり、学校の部活やハンドボールクラブチームの練習もあり、以前のように会えることが少なくなった。祖父からは今も毎日電話がくる。いつも変わらず、他愛もない用件だ。私はその日の出来事をたくさん話す。あまり、かわり映えのない内容だけど、

毎日話す。夏休みで祖父の家で昼ご飯を食べる時もある。
「ごちそうさま。おいしかったよ。」
を必ず言うようにしている。祖父はとても嬉しそうだ。
当たり前の日常は、突然当たり前ではなくなる。その時に、後悔はしたくない。祖父だけではない。友達、家族、先生。私の態度・言葉で嫌な思い、悲しい思いをさせないよう、毎日を過ごしていきたい。もちろん、できない時もあるだろう。その時は素直に謝ることのできる自分になりたい。当たり前の何気ない日常を日々、大切にしていきたい。

優良賞

人とのつながり

第一中学校　三年　村井来気（むらいらいき）

僕の家庭は母子家庭です。兄がいますが仙台の大学でアパート生活、ペットは犬が二匹と猫が一匹で普段の生活には特に不便を感じたことはありません。でも最近母の様子がおかしいのです。僕が知らない間に体調を崩していたようで病院で検査を受けたりしたと後から聞かされました。そんな時突然の入院手術が決まり、二週間程度の予定ということです。母はいろんな人に毎日電話にＬＩＮＥばかりしていてゆっくり話す時間もありませんでした。よく考えてみると僕は独りになるんだなと不安がズッシリとのしかかってきました。犬のご飯は？猫のトイレは？僕のご飯は？洗濯もしたことが無かったので、短期間に説明されてもさっぱり覚えられる自信がありませんでした。もう中学生だけどまだ中学生です。
母の入院の日がやってきました。朝はいつも通りに朝食を食べてから、車で学校に送ってもらい何も変わらず学校生活をし、部活後からいよいよ留守番が始まります。気合いを入れてやってみせるぞ！しかし、実際には、友達の家族みんなが下校からお風呂、夕食、洗濯、送迎まで一緒に過ごしてくれたのです。朝は母の友人がペットのお世話や朝食を用意し、登校までを毎日助けてくれました。さすがに夜はひとりで眠らなくてはいけないので、正直怖かったです。
母は、きっと僕を思っていろんな人達に助けを求めて、学校生活に支障が無いように頼んでくれたんだと思います。体調が悪いのに入院後のことまで本当にたくさんのお願いをしてくれていました。
僕は今までこんな日が来るなんて考えたこともありませんでしたが、今回の母の入院手術で周りの方々からこんなにも支えられ助けられている日々に感謝しかありません。人との繋がりって大切なんだと実感しました。
僕は普段から感情の表現が上手く伝えられません。相手の心理をうかがってしまう、言うべきかやめるべきかで悩み結局は言葉にできずに終わります。本当はもっと意見や感想を伝えていれば上手く交流できるのに、今後進学もするので感情のコントロールを学びたいです。
そんな悩みの中、母の退院が決まりました。十日間程度での無事な退院です。母の友人が
「一緒に迎えに行く？」
と聞いてくれました。もちろん行きたいに決まっています。元気な顔を見るまでは、正直落ちつきません。

病院に到着しましたが、コロナ感染状況によって中には入れませんので救急出入口で待っていました。おそらく十五分ぐらいの待ち時間でしたが僕にとっては一時間以上待たされた気分でした。エレベーターを降りて母と友人がゆっくりゆっくり近づいてきた時の様子は、第一印象が、やせていない！でした。想像だとゲッソリやせて顔が青白くなっていると思っていたので声が出ませんでしたが、姿を見て超安心感で笑顔になりました。

兄が、入院してから三日目に突然仙台から帰省しました。大学の先生が心配して帰るように言ってくれたようです。静かな家の中がパッと明るくなり僕の安心感といったらどうやって表現したらいいのか戸惑うほどに最高のサプライズでした。

こんな出来事を経験して、困っている人がいたら助けてあげられるようないい人になりたいです。

優良賞

小さな力でも助けられる

三本木高等学校附属中学校　一年　佐々木（ささき）　悠人（ゆうと）

二月の大寒のころ、寝る準備をしていた母が、突然、うーんとうなり声をあげたので、

「お母さん、どうしたの。」

と聞いてみると、

「脇腹が痛くて、死にそうなんだよ。」

と。顔は青ざめ、冷や汗をかきながら答える。

僕は、おばあちゃんからときどきやってもらっているマッサージのことを思い出し、痛いところをさすったり、押したりしてがんばってみたが、よくなるどころか、ますます、

「あー痛、痛、痛ーい。」

と、のたうち回るばかりだった。

母は、なんとか、力をふりしぼって、

「お父さん、救急車呼んでちょうだい！」

と頼むが、父は、初めてのことで、救急車を呼ぶことにまよってしまった。おまけに、夕食にアルコールも入っていたため、病院まで乗せていくことすらできなかった。

僕は、たまらず、勇気をふりしぼって、母のために、一一九番をまわした。

「名前は？」

「佐々木悠人です。」

「住所は？」

「十和田市です。」

「どうしましたか？」

「母が、脇腹が痛いと言っています。」

「他にどんな様子ですか。」

「顔が青く、吐き気もあります。」

「では、今すぐそちらへ向かいますので、救急車の音がしたら、外へ出てください。」

その後、すぐに、八戸に住んでいるおじいちゃんに電話。
「もしもし、悠人だけど、お母さんが、左脇腹が痛くなって、僕、マッサージしてもよくならないし、吐き気はするし、顔も青くなってしまって、みんなで相談して、僕が救急車を呼んだの。おじいちゃん、おばあちゃんもこっちへ来てちょうだい。」
電話が終わって何分もしないうちに、ピーポーピーポーと音が聞こえてきた。
母は、救急車到着前にトイレを済ませた。
救急車に乗せられた母は、救急隊員に、痛いところの確認をしてもらった。隊員は、知識と経験から、即座に、尿管結石ではないかと判断し、血圧を測った。母の普段の血圧と比べたら、とても高かった。
この間、僕と父は、救急車に乗せられ、母に何事も無いようにと祈るばかりだった。
病院に到着したら、お母さんのあの苦しみが、どこかに飛んでいったようにけろっとしている。
母が先生に、
「先ほどまで、左脇腹が痛く、吐き気もしていたのですが、少しよくなってきました。」
ということを話し、CTを撮ってもらった。
ところが、何も写らなかった。
そこで、母は、先生に、
「救急車に乗る前にトイレに行き、救急車に乗っている時から、だんだんよくなっている感じがして、病院に到着したら、痛みが消えたんです。」
と話すと、先生は、
「多分、その時に、尿管結石が流れたんでしょう。」
と話され、薬だけ処方された。
おじいちゃんに連絡をとり、病院に迎えに来てもらった。
家に帰って、おじいちゃん、おばあちゃんと五人で、
「よかった。よかった。不思議なことが起こるもんだね。」
今までのうなり声が歓声に変わった。
おばあちゃんが、僕のことを
「悠人に優しい心があったから、子供でもいろいろな行動ができ、それが一番の薬につながったと思うよ。」
と、ほめてくれた。
次の日、専門病院での尿検査の結果、潜血が少々あるだけで、他に異常なしということで薬をもらって帰り、一安心することができたと母から教えてもらう。
会社に出勤した母は、みんなから驚くばかりの話を聞くことができた。長時間の痛み、入院、手術などを経て、家族に迷惑をかけた話ばかりだったとのこと。
母の家系には、胆石になっている人が多くおじいちゃんも持っている。そこで、今後、胆石予防のための食事法をおばあちゃんに聞いてみた。
高たん白、高脂肪の肉料理を見直し、野菜の中でも、シュウ酸を多く含む野菜にも気をつけ、カルシウムを補ってほしいとのこと。
野菜は、産業廃棄物を発こう処理した肥料を中心にし、おばあちゃんの自給自足精神で作った新鮮野菜をもらって助けられている。
みんながそれぞれの長所を生かし、世界中の人々が助け合って生きる世の中にしたい。

佳作

曽祖父から学んだこと

三本木高等学校附属中学校　一年　立崎（たちざき）　紗也子（さやこ）

みなさんは「ふれあい」と聞いて何を想像しますか？家族と会話を楽しむことでしょうか？家族でテーブルを囲んで団らんすることでしょうか？私が想像していた「ふれあい」は家族みんなで何気ない会話でもり上がっているような様子です。そんな私の想像する、「ふれあい」が変わったのは曽祖父が家から施設へと移り、家からいなくなってからです。

それまで曽祖父とは、長い時間いっしょに過ごしていたわけでも、自分から話しかけにいっていたわけでもありませんでした。でも、私を見かけたら話しかけにきてくれました。

「学校はどうだ。楽しいか？」

「今日は天気がいいなぁ。」

そうした、たあいない会話でもり上がることがたびたびありました。こういうのが当たり前だと思っていました。曽祖父が施設へ行き、家からいなくなってから、その当たり前がなくなり、気づいたのは、そうした日常の中の何気ない会話も「ふれあい」だったのではないかということです。曽祖父との会話は、どうでもいいようなことが多かったけど、自然とお互い笑顔になれるようなものでした。そんな時間がなくなってから、あの時間も「ふれあい」だったと感じるようになりました。「ふれあい」は家族みんなで意識的に会話や団らんをして楽しむだけでなく、普段の日常での何気ない会話だったり、だれかのためにする何気ない行動、意識的ではないその「何気ない」ことも「ふれあい」と呼んでいいのではないかと気づき、学びました。曽祖父から学んだことはもう一つあります。

施設にいる曽祖父に面会に行った時です。入り口に入るとすぐ目の前にとびきり笑顔な車いすに乗っている曽祖父がいました。以前来た時より元気そうで安心しました。以前はコロナのためアクリル板ごしだったけど、アクリル板がなくなり、より近くに感じることができました。それから家族で会話をしようとしていました。しかし、曽祖父は耳が聞こえないため、会話がうまくいかず苦戦していました。その時だれかが、

「紙に書いて答えてもらえば良いのでは？」

とつぶやきました。それを聞いた施設の人が大量の紙を持ってきてくれました。紙に伝えたいこと、聞きたいことを書いて、見せるとすぐに答えてくれました。目はとてもいいらしく、書いている時にしゃべり出してしまうことがたびたびありました。みんな笑顔で楽しそうでした。その時私は、ちゃんとした会話はできなくても紙に書いて伝え、お互い話せて楽しく過ごせるならそれは、「ふれあい」といっても良いのではないかと感じました。曽祖父はなみだを浮かべながら、紙に書かれた文字を見て、たくさん話してくれました。帰り際、あくしゅした時、細いが温かく力強い手に感動しました。ほんの少しの短い時間だったが、忘れられない大切な曽祖父と「ふれあえた」時間になりました。

そんな時間を過ごして私が学んだのは、「ふれあう」ことに五体満足は関係ないということです。耳が聞こえなくても、工夫することでふれあうことができます。なら、どんな不自由者でも、必ずだれかとふれあうことができると学び、感じました。

曽祖父から学んだことは二つ。日常の中の何気ない会話なども大切な「ふれあい」。そして、その「ふれあい」はどんな不自由者の人でも感じあえる。このことを学び私は、普段の日常生活の中でどんな人でもいろんな人とふれあえるチャンスがあることを知りました。そのチャンスを実現するためには、五体満足である私達は、自分から積極的に身近にいる家族や地域の人とふれあう時間をつくったり、体が不自由な人達のためにやり方は違っても、知恵を働かせて、工夫し、楽しくふれあえる場を作るなど、一人一人の行動がとても大切になってきます。体の不自由な人でもどんな人でもみんなが受け入れて、身近な「ふれあい」などでお互い楽しくふれあえるようになれば、いつか笑顔あふれる、すてきな世界になると考えます。そんな世界になれば私と曽祖父のように、どうでもいいような話でもり上がって温かい気持ちになる人が増え、それが、やさしさへとつながる。そしてやさしさを持つ人が増えれば、戦いはなくなります。だれもがいろんな人と自然にふれあえるようになることが戦争のない「平和」への第一歩だと私は思います。

佳作

「ふれあい」から学んだこと

切田中学校　二年　沢目麻紘

私は中学生になってから、祖父母の家に行くことが多くなりました。学校と祖父母の家が近くにあり、学校帰りには夕食を食べさせてもらったり、夏休みや冬休みなどには部活終わりに立ち寄って、昼食を食べさせてもらい、夕方まで過ごしたり、これが自分の日課のようになっています。

祖父母の家に立ち寄るのには、もう一つ理由があります。それは曽祖母とのコミュニケーションを大切にしたいと感じているからです。曽祖母は私が中学生になったころから認知症が進んできたように感じます。認知症が進行しても、私が行けば寝室にいる曽祖母がリビングに来て何かと話をしてくれます。私はそれがとてもうれしいし、なんだか落ち着く時間になります。私が帰るころになると「また来い。」と言ってくれるので「来てよかった。また来よう」と思えるのです。

しかし、勉強や塾で忙しくて、なかなか祖父母の家に行けず、久しぶりに行った日、曽祖母はリビングに出てきてくれませんでした。寝ているだけかもしれないと思い、寝室に行って声をかけようとすると

「あんたどこの娘かい？」

と言われてしまいました。一か月も会わないうちに忘れられてしまったのです。その日はショックで何も言えませんでしたが、このままではいけないと思い直し、その日から行ける日は絶対に行こうと決意しました。

母にこのことを話したら、「コミュニケーションをたくさんとると、認知症の進行を遅らせることができるんだよ」と教えてもらったことで、私の決意はさらに強くなりました。

この日を境に、毎日は無理だけど、毎週月曜日に祖父母の家に行くようになりました。夏休みは部活の帰りに寄って、曽祖母と話す時間をつくりました。すると、曽祖母はまた以前のようにたくさん

の話をしてくれるようになりました。私の通う切田中学校の地域のことをよく知っているので、学校や地域のことを話題にするとたくさんのことを教えてくれます。それを聞いているうちに、自分の気持ちがすっと晴れやかになったように感じています。だから、これからも曽祖母とのコミュニケーションを大切にしていきたいと思っています。

曽祖母のことをきっかけに通い始めた祖父母の家ですが、祖父母は私の学校の送迎をしてくれたり、食事の面倒を見てくれたり、私のためにたくさん手助けをしてくれています。自分の仕事をしたり、田んぼの手いれなどもあったりして忙しい中、いろいろやってくれていることに感謝をしなければならないなと思っています。そんな忙しい中でも、祖父母にできることは何だろうと考えたとき、二人が喜ぶことをするのが一番ではないかと思いました。

二人が喜ぶこと、それは私がお手伝いをすることかなと考えました。しかし、曽祖母と関わる中で、コミュニケーションがすごく大事ということを学んだことを思い出しました。そして、いつもにこにこして私の話を聞いてくれる二人の顔が笑顔だったことも思い出しました。だから、私は祖父母のお手伝いをしながら、たくさん話をしたいと思っています。祖父母や曽祖母とのふれあいを大切にしていきたいです。

作文

憧れる先輩

第一中学校　二年　小澤瑠斗

僕が通っている十和田市立第一中学校では、このまえの七月十八日火曜日に若鷹ボランティアというろまんパークをきれいにするボランティアを行いました。この活動は、僕は去年もやっていて、そのときは土集めという仕事をしていました。土を集めるだけの仕事なのに腰や肩がとてもつらく、苦しかったけど同級生と協力してたくさんの土を集めることができたのでうれしかったです。そして今回、二年生になって行うことになった仕事は噴水清掃でした。あの、大きな噴水を掃除するのかと思うと、とても大変そうだけど一生懸命がんばろうと思いました。

若鷹ボランティア当日、僕ら、十和田市立第一中学校の生徒達は歩いてろまんパークまで行きました。やっとろまんパークにつき、一休みしてからさまざまなグループの仕事が始まりました。僕のグループの噴水清掃チームは役割分担をして二つの仕事に分けました。一つ目は、噴水の中に生えているこけをブラシで磨く人、二つ目は、ブラシで磨かれて落ちたこけを水きりを使って水と一緒に排水口まで流す人です。僕は、ブラシで磨く人の方をやりました。そのときは、気温がけっこう高めだったので噴水の中に足を入れると冷たくて気持ちよかったです。

さっそくブラシでこけを磨きましたがなかなか落ちませんでした。とても頑固なこけでたくさん磨いてやっとこけが落ちるくらい

なので大変でした。僕は、この仕事が初めてだったので、まだあまりやり方がわからずどうしたらいいんだろうと考えたり悩んだりしていると横から誰かが声をかけてくれました。僕は声をかけてくれた方を見ると先輩が笑顔で

「小澤、この仕事初めてなんだろ。やり方教えてやるよ。」

といかにも先輩らしい言動で僕に優しく話しかけてくれました。

僕は、先輩が掃除したところを見ると自分が掃除したところとは段違いでまるで真っ白な新車を見ているような感じでした。先輩のやり方を見ていると僕のところにあったあの頑固なこけがすぐになくなってしまいました。僕は目を大きく見開いてしまいました。あれほど、たくさん磨いてやっととれたこけが、こんなに簡単にとれるなんてと思いました。先輩に教えてもらったやり方を試しにやってみると、こけが驚くほどきれいにとれました。

その後も、休けいをしながら掃除を続けていると今年、この中学校に入ってきた一年生がおどおどしているのが目に入りました。僕が、さっきの先輩のように教えに行こうとしたときにはもう別の先輩が近づいて話しかけていました。僕は、それを見て驚嘆しました。僕より、一つ学年が上なだけなのに、こんなにも違うのかと思いました。そして、同時に不安も感じました。僕が三年生になったらここまでのレベルに到達できるのか、逆に迷惑をかけてしまうのではないかと思いました。でも、僕は、自分が今できることを精一杯がんばりたいと思いました。そして、残りの時間も、アドバイスなどをし合い、たすけあって掃除しました。

やっと、長かった噴水清掃も終わりました。途中、ちょっとしたハプニングもあったけどそれを優しくカバーしてくれる先輩はとてもすごいし憧れました。中学校に歩いて帰るときも噴水清掃で起こったことが頭からずっと離れませんでした。僕が、ここで体験したことをそのままにするのではなく、このことを活かし、僕が三年生になったとき憧れられる先輩になり他の人と協力してたすけあいたいです。

佳作

思いやり

十和田中学校　一年　坂本大翔

「思いやり」とは、なんだろう。これを、家族と話しあってみました。

お母さんのお店には、いろいろな人が来ます。例えば、目の見えない人が来ます。この人は、目が見えないので、欲しいものを探せません。ときどき、物にぶつかりそうになります。近くにいるお客さんが、「危ないですよ。」とひっぱってあげたりします。

欲しいものは、店員さんにたのんで、持ってきてもらいます。難しいのは、色や形を選ばなければいけないものです。

「靴のサイズは何センチですか？」

「エコバッグの大きさはどのくらいがいいですか？」

など、こんなふうに聞きながら、欲しいものを探して、選んだものの、色や模様、値段などを伝えて、これでいいか聞いてからレジに行きます。これで買い物がおわります。

目が見えないのにどうやって家から店に来ているのだろう？ぼく

だったら、人にぶつかるかもしれないし、道に迷うかもしれないので、怖くて家から出たくないなと思うと思います。うっかり物を落としてしまったとき、だれかがそれを拾ってくれたらいいのに。困った時、だれかが助けてくれたらいいのにと思います。

他にも、おじいさんやおばあさんも来ます。おじいさんやおばあさんは、たくさん歩きまわれないので、欲しいものを見つけられません。それと、物を落としても、拾うことが難しいそうです。サイフからお金を落としてしまったり、杖をたおしてしまったりした時、拾ってくれると、すごく助かるそうです。

重いものをもってあげたり、忘れ物を届けてあげたりしても、助かるそうです。このぐらいなら、僕達でもできそうだと思いました。

にん婦さんや、小さい子供を連れたお母さんも来ます。お腹に赤ちゃんがいるので、重い荷物を持ってあげたり、小さい子が、勝手に外に出ようとしたり、自動ドアのまわりで遊んだりしないように、注意してあげるそうです。

お母さんが言うには、仕事でやっているときは、お金をもらっているので親切ではなく、サービスというそうです。自分の利益にならないのに同じことをすれば、親切ということになる。でも、どちらも「思いやり」や、「気づかい」がなければできないこと。どんな場面でもみんながそうやって思いやりの心をもって助けあうことができたらとても優しくなれると思います。

夏休みになって、二十四時間テレビがやっていたのを見て、見たこともない人達のために、募金したり、ボランティアをしたり、これも思いやりだなと思いました。東日本大震災の時も、がれきのてっ去のボランティアに行く人や、物資の支援を行ったり、みんなが助け合っていました。ロシアがウクライナに侵攻した時にいろんな国が、ひなん民を受け入れてあげたのもすごいと思いました。なぜなら、助けたことで、ロシアを敵にまわすことになるかもしれないし、ひなん民を何年支えないといけないのか分からないから、とても勇気のいることだからです。

だれかのために、何かをしてあげたいと思う気持ち、その気持ちがみんなの心を動かして、大きな思いやりになったり、いろんな形の思いやりがあると思いました。僕も、僕にできる思いやりをたくさんしていきたいなと思いました。

佳作

ゴミ拾いから広がる私の考え

甲東中学校　三年　沢目由春来（さわめゆずな）

ある日の出来事だ。いつも通りの登校中、道路にあるものが落ちていた。それは、コンビニの袋に入っていた食べた後のプラスチックゴミだった。それを見た私は、道の真ん中にあるから拾った方が良いとは思いながら、汚いし、誰かがやってくれるだろうと無視してその場を立ち去ってしまった。しかし、学校に着いた後、やはり拾った方が良かったなとモヤモヤした気持ちのまま、一日を過ごした。下校時刻が近づき、もう一度行ってみてあったら拾おうと思ったがもうなくなっていた。誰かが拾って捨ててくれたのだろう。

日本では、ゴミを拾うボランティア活動が全国各地で行われている。私も実際に小学生のころに学校の活動の一環としてクリーン活

動に参加していた。全校生徒や先生方、地域の方々も一緒にゴミを拾う活動をしていた。しかし、そういった機会が無くなると気がついていても他人事に捉え、スルーしてしまうことがふえた。私だけではないだろう。同じような経験は、誰にでも一度ぐらいあるのではないか。そもそもさまざまなイベントや日常生活の場面で、ゴミは持ち帰って捨てることやポイ捨てをしないことが呼びかけられている。それなのにも関わらず、当然のようにポイ捨てをする人がいるというのが、今の日本の現状ではないか。

しかし、本当に私たちの暮らしている街や地域が汚れていても良いのだろうか。このままで良いのか考えた。そこで気になったので、ネットで、ゴミ拾いについて調べることにした。すると、「ゴミを拾う」行動について興味深い記事が目にとまった。それは、大谷翔平選手についての記事だ。練習中や試合中のベンチやグラウンドでゴミを拾う姿が報道され、その姿を賞賛する声が上がったという内容だった。大谷選手は、高校生のときから、ゴミを拾っているそうだ。この行動は、その時に作成した目標シートにかかれている。今年開催されたワールド・ベースボール・クラシックの第五回大会では、大会ＭＶＰを受賞し、今や世界で最高の野球選手と言われる大谷選手が運を身につける要素の一つとしてゴミを拾っている。また、サッカーのカタール・ワールドカップでは、日本代表の活躍だけでなく、日本人サポーターも話題になった。試合を観戦後、スタジアムでゴミを拾う姿を見た現地のスタッフなどが感謝の言葉を贈ったそうだ。このように日本人の行動が賞賛され、なんだかうれしくなった。

他に日本の良さとは何かと気になり、ゴミ拾い以外にも目を向けてみた。そこで注目したのは、海外の方々から見た日本人のイメージだった。日本人について、時間を守ったり、列に並んだりマナーが良いことや礼儀正しく優しくて親切だというイメージをもたれている。他にも安全性や豊かな自然、日本独自の「お祭り」などに魅力を感じ、日本へ観光するため来る人もいるようだ。

私は、今まで知らなかった日本の良さに気づくことができた。心の広い人がいる反面、全ての人が思いやりの心をもっているとは限らないと思った。もし、全国民が自分勝手に行動したらどうなるのだろうか。たぶん、街にゴミがあふれかえってしまうだろう。列に並ばず、道も混雑して転んでけがをする人もいるだろう。時間を守る人がいなかったら、電車も上手く稼働せず、遅刻する人がいて迷惑をかけてしまうだろう。日本は、トラブルで生活が困難になると思う。だから、普段当たり前だと思ってしている行動も、少しの思いやりで質が高まっていくと、改めて感じた。今の日本の治安の良さや海外の方々から見た日本のイメージを保っているのは、大谷選手や日本人サポーターをはじめとした、思いやりの心をもつ素晴らしい人達のおかげだ。まだ、トラブルや事件がゼロなわけでも、全員が良いイメージ通りなわけでもない。中学生である私一人が行動して変えられるほど容易なことではないが、一人一人の意識が大切だと思う。「思いやり」の中身を考えると自分にできることは数多くあると思う。だから、小さな行動でも自分のメリットではなく、誰かのために積極的に行動したい。そして、広い心をもち、思いやりある言動ができるよう日々努めていきたい。また、今回注目した記事などが少しでも多くの人に届き、「私もまねしたい、そうなりたい」と思える人や、もっと日本のことに誇りをもてる人が、増えてほしい。

高等学校の部

最優秀賞

言葉は魔法

十和田工業高等高校　一年　高橋（たかはし）　真龍（しんりゅう）

二〇二三年二月下旬、私はインフルエンザにかかってしまった。数日後に受験をひかえた私は、「なんでなんだ、最悪だ、もう終わった」と地獄にいる気分だった。もともと勉強は嫌いだったので、せめてという思いで勉強に力を注いだ。塾に週五で通い、オンラインの授業を週二日。あと少しで受験から解放される一歩手前でのインフルエンザ。

祖父と病院に行った待合室での出来事。顔も名前も分からない一人の老人に、

「受験生かい？」

と聞かれた。多分、ジャージを見て中学三年生くらいと判断したのだろう。私は正直、「めんどくさいなあ」と心の中で思い、小さく、

「はい。」

と返事をした。するとその老人は、診察が終わり帰る私に、

「インフルエンザだったのかい？」

と聞いてきた。私はふてくされて、

「はい。」

と告げると、その老人は、

「二、三日遅かったら受験できなかったね。今で良かったんだよ。ラッキーだね。」

と笑顔で話し、大丈夫と肩をポンとたたいて帰っていった。その時の私は、何がラッキーなもんかと腹立ったが、数日後、熱も下がり、少しずつ体はもとの状態に戻り無事に受験ができた。受験が終わりふとその老人の顔が頭に浮かんだ。確かに、あと二、三日遅れていたら受験は難しかっただろう。

今は第一志望の学校で勉強ができ、友達もたくさんできた。大好きな陸上部に入り、毎日が楽しくてたまらない。

病院での私のふてくされた態度、少し後悔している。この場を借りて老人に感謝の気持ちを伝えたい。その時すぐには理解できなかった言葉。どんな状況の中でも私は誰かとつながっている。誰かを思う優しさ。励ましの言葉。言葉は時には暴力にもなる。言葉は魔法だ。たった一言でも人を幸せにもできる。たった一言でも力がモリモリ湧いてくる。

私はこれからたくさんのことを経験するだろう。あの時、インフルエンザにかかっていなければ老人とも会うことはなかった。この経験は私にとって宝物だった。私も誰かを助けられる、そして優しい言葉の魔法をかけられる素敵な誰かになっていこう。

講評

高校受検を目前に控えた時期、インフルエンザに罹患してしまい、暗澹（あんたん）たる気持ちのときにある老人から声をかけられた体験をストレートな表現で綴っています。「言葉は魔法だ」の一文に言葉の力を実感した思いが凝縮されています。体言止めを駆使した軽妙な筆致も読む者を魅了します。

優秀賞

今を生きる私が思うこと

三本木高等学校　二年　鶴ヶ谷（つるがや）　心（み）陽（はる）

みなさんは「温かい」の意味について考えたことがありますか。「物の温度や気温が快い程度に高い」という意味で使われることが多いですが、辞書を引いてみると「思いやりや優しさがあること」という意味も書いてあります。あたり前に感じることができなくなったのがコロナ禍の約三年間です。学校行事が奪われ、授業もまだ黒板だけを見て、昼食も一人で静かに食べていました。クラスメイトと協力して何かをつくることはなく、マスクが原因で友達の顔をしっかり見ることができない日々を耐えてきました。そんな学校生活を過ごした私ですが、最近は人の温かさを感じることができています。学校生活で人の温かさを感じることができる瞬間を二つ紹介します。

一つ目は、みんなで文化祭や球技大会などの学校行事が楽しめることです。今までは共同で物を使うことが許されませんでした。友達との接触を避けながら生活を送っていましたが、行事をすることによって友達との距離が縮まりました。文化祭ではみんなで一緒に絵の具やペンキを使って展示する作品をつくりました。その過程で意見が食い違い、喧嘩が起きましたが、それを乗り越えてより良い作品を完成させることができました。私は喧嘩をしている友達を見て少し嬉しくなりました。なぜならコロナ禍では友達と話す機会も少なかったため喧嘩もなかったからです。喧嘩はお互いが自分の意見を言えている証拠なので喧嘩をすることを恐れないでほしいです。しかし言葉は人を傷つけるナイフにもなるのでどんな状況でも相手に届ける言葉は慎重に選択する必要があると私は思います。また球技大会ではみんなで一つのボールを使ってバスケやバレーをすることができました。あたり前だと思うかもしれませんが、制限された生活を過ごしてきた私たちにとって一つのボールを共同で使うことは大きな喜びを感じる瞬間でした。大きな声で応援されることもできない世の中だったので球技大会で応援されたときは力が湧いてきました。選手は応援されてあたり前と思っていましたが、コロナを通してあたり前のことなどないと知りました。今できていることが急にできなくなるかもしれないので今を一生懸命生きたいです。

二つ目は友達と対話できることです。通話やＳＮＳでの文字のやりとりではなく、友達と会って顔を見ながら話す時間が幸せです。休み時間にお菓子をシェアして食べたり、昼食の時間に机をつなげて話しながら食べたりする時間が好きです。今まで食事をとる時はパーテーションをして黙食することを徹底していたので、友達と話しながら食べるご飯はとてもおいしいと感じます。話してみると友達の新しい一面を知ることができます。何を考えているかを知ることで、今まで気づくことができなかった相手からの優しさや親切な行為に心が温まります。また、孤独感を抱きながら生活を送ることに慣れていたので、友達との会話の中で自分が人から大切に思われていると分かった瞬間、幸せな気持ちで心が満たされます。話さないと自分が他の人からどのような評価をうけているのか分からないので友達との会話は大事だと思います。コロナ禍では友達と自分の間に見えない壁があり、話すことができませんでしたが、これから

は積極的に会話して人の温かさを感じていきたいです。

私はコロナによって日常生活が奪われました。できることに制限がかかり困難だと思ったことは何度もありますが、学んだこともあります。それは、「人は温かい」ということです。生きる過程で人の温かさを感じる瞬間は何度も訪れるでしょう。その温かさを違う誰かに与え、たくさんの人を温かさでつないでいけたら私は「人の役に立つ後悔のない行為をした」と胸を張れるでしょう。伝統が後世へ継承されるように、人の温かさも人から人へとつないでいきたいです。温かさの継承は人々を線ではなく円にしてくれるでしょう。地球は丸く、人々は円くいるのが私の理想です。子どもは「愛」という家族からの温かさをもらって育ちます。人々は「助け合い」という他者からの温かさをもらって生きます。感じた温かさはまた別の人に与えられます。そのような人との温かいコミュニケーションは人々を円くする第一歩につながります。温かい言葉、温かい行動で溢れる世界になることを私は心から望んでいます。

講評

多感な時期の高校生が、喧嘩をしている友達を見て少し嬉しくなったという表現は、鮮烈な印象を受けます。コロナ禍を経て、学校生活のありがたさをしみじみと実感していることが伝わってきます。友達の優しさを語るなど、筆者の柔らかな文体も相まって、心が温かくなる作品です。

優良賞

僕の人生を変えた人

十和田工業高等高校　一年　駒井（こまい）　直大（なおと）

僕は今まで十六年間、たくさんの人に支えられて生きてきました。

最初に助けられた人は、県立中央病院の先生です。この先生は今もなお僕の成長を診てくれている僕の命の恩人です。僕は未熟児として生まれ、生死の境をさまよってＮＩＣＵ（新生児集中治療室）で命を救ってもらいました。

成長してからも進学のことを相談できる頼れる先生なのです。僕はこの話を親から聞いてとてもありがたいと思うとともに助けてもらったこの命を大切にして元気に生きようと思いました。またＮＩＣＵで働く看護師の人達の他、命の現場で闘い献身的な看護をしてくれた人も僕の成長を喜んでくれていました。僕はこの体験をして生きていてよかったと思いました。

二人目は、眼科の先生です。僕は未熟児網膜症になり、両目が失明する恐れがありました。そんなときに手術をし、左目を救ってくれ、今もお世話になっているのがこの先生です。もしこの先生がいなかったら僕の世界は真っ暗で好きな鉄道を見ることもできませんでした。先生には感謝してもしきれません。僕は先生が守ってくれたこの目を大切にし、いろいろなことを自分の目で見て生きていきたいと思いました。

三人目は八戸盲学校の先生です。僕が保育園の時から今まで、例えば進級や進学の際に支援器具の手配や実際に盲学校に行っての器

具の使い方や見え方の指導などをしてくれました。先生はユーモアがあり、僕の高校合格を泣いて喜んでくれました。

このように、僕は今までいろいろな人達に支えられ生きていることを実感してきました。僕を支えてくれている人に恥ずかしくないように、誠実に力強く、そして障害があっても後ろ向きに考えず、自分の個性も周囲の個性も大切にして前向きに明るく元気に楽しく生きようと思いました。また自分と同じような障害を持つ人の力になれるよう、自分の経験をもとに一緒に解決していきたいと心に決めています。

優良賞

輝いていた水滴

十和田工業高等高校　一年　高渕心華（たかぶちここは）

大きく聞こえる雨の音。じめじめとして蒸し暑い。肌に服がひっついて少しうっとうしい。空はまるで私の心と同化しているのかのように重く、そして、水を落としていた。そんな日の出来事だった。

「おはようございます。」

いつもと変わらない朝だった。七時三十五分に児童玄関に着くと、先生があいさつをしてくれる。この瞬間は、なぜだか少し心がウキウキする。嬉しいのだ。しかし、照れくさい私は下を向き小さな声で

「はいざいます。」

といつも適当に返事をしてしまう。教室へ向かう。この時間はとても楽しい。今日は友達とどんな話をしようかな。時間割りなんだっけ。考えることが満載だ。教室に着いた。今日は朝読書ではなく漢字練習の日らしい。私はなぞることが嫌いではないので悪い気分ではなかった。字をなぞっていく。畑、野、灰、父……。私は思い出してしまった。三か月前、亡くなった父のことを。急に目が溺れた。大量の水が目から溢れてくる。私は保健室に走った。誰にも見られたくない一心で走った。保健室に着くと導かれるままに泣きながら話をした。カウンセラーさんは優しく最後まで聞いてくれた。私の目からボロボロ落ちていた水(涙とは認めたくなかった)がおさまってきたところでカウンセラーさんが口を開いた。

「辛い時は人にぶつけるのも大事。」

と。当たり前なはずなのに、知っていたはずなのに、安心してさらに涙が流れた。

この出来事は私の考え方を大きく変えた。例えるなら、太陽が西から昇る感覚だ。

私は小さなころから我慢をする子は偉いと勘違いしていた。実際おもちゃを欲しいと泣くのを我慢したら怒られることがなくなったからだ。しかし、その考えは間違っていた。

人は辛い時、よくそれを隠したがる。しかし、それはその場しの

ぎでしかなく、結局、解決にはならない。悲しい時は悲しいと心の声を外に叫んでもいいのだ。弱みを見せたくないと思うのは、プライドが邪魔をしているからである。これは限界まで私たちを追いつめ、時に消えたくなる原因にまでなってしまう。でも、少しだけ勇気を出し、人に話してみるだけで少し気持ちに光が差すことに気がついた。

私は辛い思いをしている人たちに、助けという光を与えられる存在になりたいとこの日から強く心に思うようになった。そう、私には目標ができたのだ。

雨もあがり、「さようなら」のあいさつの後、西日が差していた。雲が落としたたくさんの「水」はキラキラと輝いていた。それはまるで、人の助けになりたいという私の決意のように、とても強い光だった。

私は今でもこの日のことを覚えている。まだ目標は達成できていない。しかし、辛い思いは隠さなくても良いということはこれからも発信していきたい。

優良賞

親切の大切さ

十和田工業高等高校　一年　牛崎（うしざき）　潤之輔（じゅんのすけ）

私は、親切には二つの種類があると思っている。

一つ目は、「見える親切」だ。具体的には席を譲ることや荷物を持ってあげることなど、相手の人が心地よくなる親切だ。相手が喜ぶと私も嬉しくなり、お互いが喜びを感じ合える光景だ。

二つ目は、「見えない親切」だ。それは、言葉のやさしさである。一人でいる人や悩みを抱えている人に「おはよう」の一言をかけてあげることによって会話が生まれる。気持ちのやさしさもある。実際私も悩んでいた時に友達から声をかけてもらい、少しうっとうしいと思っていたが、心のどこかで助けを求めている自分がいた。相手は私が悩んでいることに気づいていないにしろ、たったその一言で安心感が生まれ、不安が解消された部分があった。確かに見える親切はやりがいや満足感があるが、私は見えない親切の方が大事だと思う。見える親切は感謝されるが、見えない親切は気づかれないことが多い。しかし、私はあからさまに人を助けたという正義感を抱くよりも、見えない部分で助けたり支えたりする方が気軽に行動にうつすことができて良いと思う。そして、日々の生活で癒しを与えてくれるのも、この見えない親切であることの方が多いと感じる。

私は誰かに毎日助けられているが、逆に自分が毎日人を助けることはできていない。私は毎日親に朝ご飯、昼ご飯、夜ご飯を作ってもらっている。それに対して私はたまに洗濯をするだけだ。学校では私が分からないことがあれば先生や友達に聞いて助けてもらっている。それに対して私はたまにしか助けていない。老人や小さい子どもが何か困っていそうな雰囲気をしていても、今まではあまり助けることができていなかった。

だからこれからは、家や学校、学校以外で困っている人を見かけたら私から声をかけていきたい。そして、見える親切だけでなく、見えない親切も大事にできる人になり、積極的に助けあえる社会の一員となりたい。

佳作

誰も見ていなくても

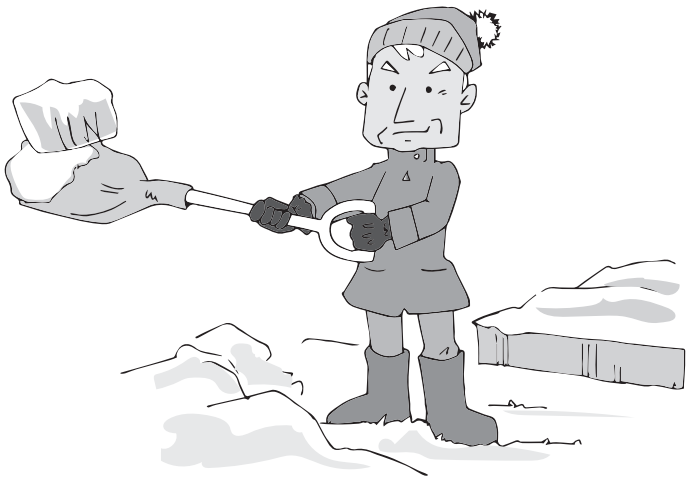
十和田工業高等高校　一年　舛澤朋音

中学生の冬、私が学校まで通う道は、雪が十五センチ以上、積もっていました。その道は狭く、あまり目立たない道なので除雪がされていませんでした。そのため、学校に行くまでに、くつ下がぬれてしまっていました。毎日こんなにたいへんな思いをして学校に行かなければいけないのか、と思っていたのですが、ある日いつもあった雪が道の端っこに寄せてありました。ついに、除雪されるようになったのかと、とてもうれしい気持ちで学校に行きました。次の日もその次の日も雪は片付けられています。

休みの日、私は部活に行くために、いつもより早く家をでました。少し歩くと、おじいさんとおばあさんが道の雪を片付けてくれていました。そこをあいさつをして通ろうとすると、

「この先、雪片付けられてなくてごめんね。」

と少し先まで、私が歩く道をつくってくださいました。私は、雪が片付けられているのが当たり前かのように毎日、登下校していました。あの、おじいさんとおばあさんは、この道を通る人達の為に毎朝、早い時間から雪片付けをしてくださっていました。自分達には何の得もないかもしれないし、誰も見ていないかもしれないのに人の為にできるのは、とてもすごいと思うようになりました。

私は、誰かに見られているから、自分に得があるからと、見返りを求めてしまいます。今までは、誰も見てないし、しなくても誰かがやるだろう、自分が良ければそれでいい、という考えでした。しかし、今は誰も見ていなくても、これをして楽になる人がいるのなら小さなことでもしようと思えるようになりました。例えば、提出物を集める時、向きをそろえたり、名簿順にする。倒れている自転車を起こす。小さなことでもどこかの誰かが助かっているかもしれません。自分にどんな利益があるのか考えるのではなく、自分がもしされたらどれほど助かるのか、楽だろうかと考え行動するようにしています。

どこかで絶対に誰かの助けになるようなことは日常の中にたくさんあります。この世の中に小さな親切が増え、生きやすい世界が広がればいいと、私は思います。